

峰ヶ丘会報

題字 和賀井睦夫 会長

第149号 2011. 10. 20



農学部附属農場（真岡市下籠谷）の建物群 2010. 9. 29

CONTENTS

農学部創立90周年事業についてのお知らせ	2
会長挨拶	3
理事長就任挨拶	4
特集 東日本大震災を乗り越えよう	5
退職の挨拶	15
新任教員あいさつ	17
支部総会	19
クラス会	21
支援制度による海外学会参加報告	26
平成23年度峰ヶ丘同窓会理事会報告	27
支部長一覧	28
お悔やみ	29
決算書・予算書	30
お祝い・寄贈図書	31
附属演習林	32



大11～昭18 高等農林学校 昭19～23 農林専門学校 昭24～36 新制宇大 昭37～ 宇大校章

MINEGAOKA NEWSLETTER No.149
The Alumni Association
Faculty of Agriculture
Utsunomiya University
Utsunomiya 321-8505 Japan
E-mail:minegaok@cc.utsunomiya-u.ac.jp

農学部創立90周年事業についてのお知らせ

1. 過去・現在・未来をむすぶ農学教育の実践—未来を切り拓く魅力ある人材の養成のために

宇都宮大学農学部は、前身である宇都宮高等農林学校が大正11年(1922年)10月21日に創設されてから、来年平成24年(2012年)で90年の歴史を重ねることになります。90周年を迎えるのを記念して、農学部と共催で、「農学部90周年事業」を行うことになりました。

この目的は、90周年を機会に、「幅広い現場で着実に重ねられてきた実績や、未来に向かって改めて伝統を踏まえながら地域との連携を深め発展していくメッセージを発信する。宇都宮大学農学部への愛着の醸成を広く、同窓生、学生、教職員、市民に向けて図る」ことにあります。このため、いわゆる記念事業だけではなく、農学部が伝統を踏まえながら未来に向かって進んでゆくメッセージを周年で広報をしていく取り組みも行っていくことになりました。

2. 実施体制及び役割分担

「農学部90周年事業」の計画を立て推進していくため実行委員会を立ち上げました。実行委員会方式で実施していくことにしたのは、昨年11月に答申された、準備委員会ともいうべき「農学部米寿・90周年事業検討委員会」(宇田委員長)からの提言を踏まえてのことです。

第1回の実行委員会は8月29日に開かれ、事業実施のための組織体制、取り組みの骨子が決定されました。実行委員会の組織は、茅野農学部長と和賀井同窓会長を委員長、杉田農学部評議員と笠原同窓会副会長を副委員長、前農学部長の石田理事を顧問、津谷同窓会理事長を事務局長に、岩淵農学部評議員、農学部広報連携委員長・学術国際委員長、各学科・コース・附属機関の教員、同窓会常任理事・栃木県庁支部長、農学部事務職員など29名の委員で構成されています。また各委員には、それぞれ「総務担当」(10名、責任者：茅野農学部長)、「式典及び講演担当」(6名、責任者：杉田評議員)、「祝宴担当」(5名、責任者：宇田同窓会常任理事)、「広報担当」(6名、責任者：岩淵評議員)、「記念植樹担当」(2名、責任者：石栗同窓会常任理事)になってもらい、具体案を検討してもらっています。

事業内容の詳細は今後決定し、来年度の同窓会報でお知らせしますが、第2回の実行委員会ならびに教授会で了承された、現時点での内容をお知らせいたします。

3. 事業内容

- (1) 90周年広報
- ① 宇都宮大学農学部90周年記念※ロゴマークの公募・作成・利用
 - ② 路線(東野)バス内でのアナウンス
 - ③ 垂れ幕による広報
 - ④ 出前授業やホームページ等による広報

※ロゴマーク公募の締切日は11月18日(金)です。ふるって応募ください。

詳しくは農学部のホームページをご覧ください。<http://agri.mine.utsunomiya-u.ac.jp/>

(2) 90周年記念事業

- 1) ホームカミング・記念講演・記念式典・祝賀会

開催日：2012年10月27日(土)

※10月19日・20日の予定でしたが、変更になりました。

- ① ホームカミング 時刻：10時～13時
場 所：宇都宮大学 峰キャンパス(峰ヶ丘講堂等)
【昼食：宇大生協】
- ② 記念講演 時刻：13時30分～15時30分
会 場：宇都宮大学 大学会館多目的ホール
講 師：2名(卒業生、修了生から)予定
【バスで移動】
- ③ 記念式典・祝賀会 時刻：16時30分～
会 場：ポートホテル(JR宇都宮駅東口近く)

2) 記念植樹

同窓の皆様、90周年記念事業の趣旨をご理解いただき、ふるってご参加ください。

なお、記念講演の講師は未定ですが、多くの学生や市民も参加できるような講演内容をお願いする予定です。

(平成23年9月末 理事長 津谷好人)



ご挨拶

峰ヶ丘同窓会会長 和賀井 睦夫（農昭25卒）

去る3月11日の東日本大震災における、大地震、巨大津波、そしていまだ収束をみない原発事故により被災された同窓生の皆様に対し、心よりお見舞い申し上げます。

また、この大震災でお亡くなりになった同窓生は、宮城でお2人、栃木でお1人、合せて3人と承っております、誠に残念の極みであり、衷心より哀悼の意を表する次第であります。

私ども同窓会は、この戦後最大といわれる大震災に遭われた同窓生の皆様に対し、少しでもお見舞いと励ましの気持ちをお届けしたいということで、4月13日、太平洋岸の被災7県の同窓会支部長さんあて、お見舞状を差し上げますと共に、更に、5月9日には、宮城、岩手、福島、青森、茨城各県の被害の深刻な市町村にお住まいの同窓生、およそ1000名の方々にお見舞状を差し上げた次第であります。

内容は別記の通りであります、一部の同窓生には、関係の深かった恩師の先生方に添え書きをして頂いて下さって頂きました。

これに対し、折り返し事務局あて20数名の方々から「同窓会から頂いた温かいお見舞いと励ましの言葉を、これからの糧にして頑張っていきます」という趣旨の礼状を頂き恐縮しております。改めて一日も早い復旧、復興を心よりお祈りする次第であります。

また、在学中の学生会員の皆さんに対しましては、従前から地震による罹災などで学費支弁が困難となった場合は、同窓会として支援制度を設けておまして、今回も実家が深刻な被害を受け、或は原発事故で一家が、長期避難を余儀なくされている方など合わせて9名の皆さんに、支援金もしくは見舞金を差し上げた次第であります。

幸い母校は、震災による大きな被害はなく、卒業式、入学式はそれぞれ中止となりましたが、授業は4月から通常通り行われていることは、何よりと思っております。

なお、この際ご報告いたしますが、母校農学部は、前身である宇都宮高等農林学校が、大正11年（1922年）に創立され、来年は90周年を迎えることになりました。

ついては、この輝かしい伝統を継承し、更なる隆盛発展を期するため、記念事業を行うこととなり、去る8月29日、準備を進めるための実行委員会を大学農学部と同窓会とで立ち上げました。今後記念式典、記念行事等の具体的な内容について決めていくことしておりますが、時期は明平成24年10月27日（土）と決定しております。同窓会の皆様には、来年、早めに発行予定の会報で詳細ご案内いたすことしておりますので、何卒ご予定頂きご出席下さるようお願い申し上げます。

卒業生のみなさん！ 後輩への就職支援・キャリア支援をお願いします。

昨今の不景気や東日本大震災の影響により現役学生の就職環境は依然として厳しい状況です。この状態は、少なくともここ数年は続くと考えられます。大学としても企業合同説明会のキャンパス内開催や就職相談窓口を増すなどキャリア支援を行っています。しかし、より細やかな支援も模索しております。そこで、各方面でご活躍の卒業生の皆様にも、後輩の就職支援、キャリアアップ支援（インターンシップ受け入れ）などご協力いただければ、「峰ヶ丘の想い出」を共有する「より信頼の高い求人と人材供給」の絆ができるものと思います。

OB、OG諸氏からの是非の支援をお願いします。

- ⑤是非後輩を試してみたい！
- ⑥是非求人を出したい！
- ⑦是非母校の人材情報を知りたい！

という方は、迷わず下記にご連絡ください。

担当が丁寧に対応いたします。

〒321-8505 宇都宮市峰町350
 宇都宮大学キャリア教育・就職支援室
 担当：白川 勝彦
 電話：028-649-5088
 Fax：028-649-8184
 Mail：sirakawa@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp



平成21年10月にオープンした「キャリアカフェ」
 -就職関連資料の閲覧や学生の情報交換ができるたまり場-

特集 東日本大震災を乗り越えよう

3月11日の東日本大震災の後、常任理事会では下記のような対応をするともに、東日本大震災の特集記事を会報に掲載することについて議論してきました。最終的に「東日本大震災を乗り越えよう」というテーマのもと特集することを決定したのが遅くなってしまい、原稿を依頼した方には、締切までの時間が少なく、ご迷惑をお掛けしました。お陰様で皆様に協力いただき、このようにまとめることができました。この特集が、会員の皆様が大震災を乗り越えるための一助となれば幸いです。

● 峰ヶ丘同窓会の取り組み

東日本大震災後の同窓会の対応としまして、まず4月13日には、太平洋沿岸地域の被災県7県の支部長あて下記のとおり、お見舞い状をお送りしました。

さらに東日本大震災の災害救助法適用地域の中で特に被害の深刻だった宮城、岩手、福島、青森、茨城の市町村に在住の約1000名の会員の皆さんに5月9日、お見舞い状を差し上げました。

学生会員の中で、自宅もしくは実家が被災した学生に対しては、被災の程度によって、「学費支援」あるいは「災害見舞金」という形で支援をおこなってきました。これまでに、以下の表のとおり9名の学生に対して支援をおこなっています。

改めて被害に遭われた全会員の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

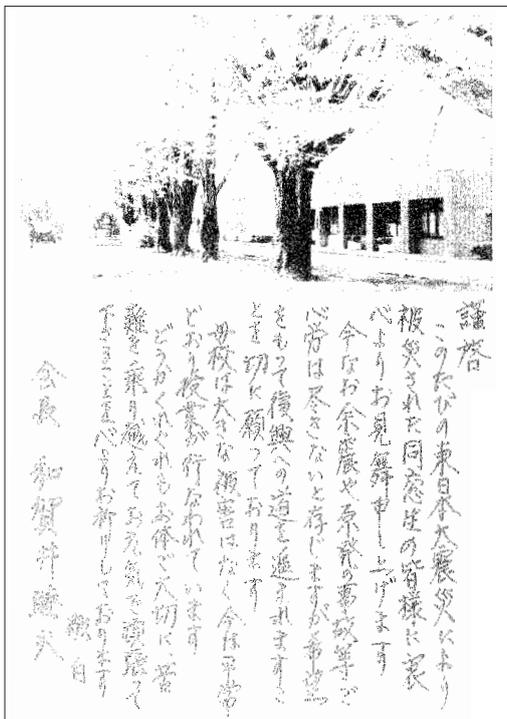
平成23年4月13日

(青森・岩手・宮城・福島・茨城・千葉・東京)
支部長 様

宇都宮大学農学部峰ヶ丘同窓会
会長 和賀井 睦夫

謹啓
このたびの東日本大震災により、被災された同窓生の皆様に、衷心よりお見舞い申し上げます。
M9.0という大地震、想定を越えた大津波、そして今なお終息をみない原発事故、更に加えて、今も続く活発な余震等、被災地の皆様のご心労、ご苦勞はいかばかりかと、心よりお察し申し上げます。
日々、テレビで流れる戦災を思わせる被災地の様子を見るにつけ、胸がつまり、支部長さん始め、同窓の皆様のご様子はいかがかと案じております。
これからは、一日も早く諸々の厳しい現状が好転し、復興への希望につながっていくことを切に願っています。
母校は大きな被害はなく卒業式、入学式は取りやめとなりましたが、前期授業の開講に向け準備が進められています。
どうか支部長さん始め、支部の皆様には、くれぐれもお身体を大切になされ、苦難を乗り越えてお元気で頑張ってください。心よりお祈りしております。

謹白



被災県支部長宛の見舞状

同窓生宛の見舞状

東日本大震災 同窓会学生支援者一覧

(平成23年9月末現在)

支援内容	学科・コース・学年	住 所	被 害 状 況
学 費 支 援	応用生物学コース 3年	宮城県気仙沼市	家屋全壊
学 費 支 援	動物生産学コース 3年	福島県郡山市	家屋半壊
学 費 支 援	動物生産学コース 4年	福島県双葉郡富岡町	原子力災害による計画的避難区域内
学 費 支 援	農業経済学科 4年	宮城県東松島市	家屋大規模半壊 床上浸水
災 害 見 舞 金	植物生産学コース 2年	青森県八戸市	家屋一部損壊
学 費 支 援	農業経済学科 2年	岩手県釜石市	家屋大規模半壊
災 害 見 舞 金	応用生物学コース 3年	茨城県古河市	家屋一部損壊
学 費 支 援	農業環境工学科 1年	福島県相馬郡飯舘村	原子力災害による計画的避難区域内
学 費 支 援	森林科学科 1年	岩手県下閉伊郡山田町	家屋全壊

● 東日本大震災被災県支部からの報告

【岩手県】

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震では、全国から多くの温かいご支援をいただき、本当にありがとうございました。

さて、岩手県にとってこの地震により発生した巨大津波は、明治29年、昭和8年の三陸地震津波、昭和35年のチリ地震津波を凌ぐ大規模なもので、陸前高田市や大槌町、山田町などでは中心市街地が壊滅的な被害を受けるなど、沿岸各地に深刻な被害をもたらしました。

特に、被害の大きかった陸前高田市や大槌町では住民の約1割が犠牲になるなど、県内の死者・行方不明者は6,677人（8月10日現在）に及び、全半壊した建物は約2万9千棟、避難者は震災直後に約5万2千人を数えたほか、ライフラインや物流寸断の影響は、内陸部を含めた全県に及びました。津波による被害がなかった人でも、知人に親族を亡くした人、家を喪失した人が少なくないことから、県民の多くが津波被害の怖さを身近なものとして体験しました。



津波の後、火災にあった大槌町市街地（平成23年5月撮影）

また、恵まれた三陸の海で地域経済を支えてきた水産業が甚大な被害を受け、漁港や漁船、養殖施設、水産加工施設など約3,590億円の被害となったのをはじめ、農地の浸水や海岸林の流失、林野火災など農林業の840億円、商工業等の1,660億円、海岸保全施設や港湾施設等公共施設の2,570億円など、県内全体では県予算の1年分を超える大規模な被害となりました。

震災当時は、雪が降る日もある例年より寒い春でしたが、直後から国内外の多くの皆様から、義援金や支援物資等の温かいご支援をいただき、また、全国各地から自衛隊や警察、消防、自治体、医療機関、ボランティアなど多くの方が被災地に駆けつけ、人命救援や被災者支援にあたる姿は、被災者と多くの県民に希望を与えてくれました。

今では、瓦礫で覆い尽くされていた町は整理が進み、一部の港では魚市場が再開するなど、明るい話題も上るようになりました。これまで長期に及んだ避難所生活も8月中には解消するなど、徐々にではありますが、日常を取り戻すための歩みが始まっています。

津波により流失した陸前高田市の名勝「高田松原」に残っ

た「奇跡の一本松」は、復興のシンボルとして多くの人の希望が託され、枯死の危機を乗り越えて今もお懸命に生き続けています。また、平泉の文化遺産が6月26日に、ユネスコ世界遺産に登録されたことは、大きな誇りとなりました。



陸前高田市「高田松原の奇跡の一本松」（平成23年6月撮影）

恵まれた豊かな自然と共生し発展してきた東北が、一日でも早く元の姿に戻るよう頑張っていきますので、引き続き、変わらぬご支援をよろしくお願いします。

岩手県支部 事務局 及川 明宏（林63）

【宮城県】

○ 宮城県の東北・関東大震災

1. 宇都宮大学同窓生の動向

農学部出身の同窓生は内陸部に居住していた人が多く、死亡者や行方不明者の情報は昭和42年卒業・林科の及川秀夫氏が多賀城で死去、三陸海岸や仙台湾沿岸の出身者の中には親族の死亡者、行方不明者がいるのも確かである。

地震による家屋の被害は瓦や壁の破損・家具の転倒等、軽微に留まったが、津波による被害は同窓生の家屋流出が1件あった。



気仙沼市内

3月14日には同窓生が中心となって、炊き出し等のボランティア活動を開始した人達もいた。当初の活動で各地元の消防団員、全国の警察官、自衛隊員の方々の奮闘には、政府や自治体の動かない中で頭が下がる思いであった。同窓会からの励ましの手紙にも感謝申し上げます。



名取市小塚原地区

2. 地形の変化

地震予兆は宮城県沖で3月9日にM7.3の地震が発生、気象台と東北大は三陸沖地震と無関係と発表した。3月11日14時46分M9.0の地震が発生。岩手県沖M7.3から始まり三陸沖、福島沖、茨城沖と連動し揺れは5分程度続いた。余震は4月7日23時32分宮城県沖でM7.1震度6強の突き上げるような揺れで、3月11日より家屋内では被害があった。

地形の変異は牡鹿半島の先端部が東へ5m30cm移動。地盤沈下は石巻市鮎川で125cm、渡波で78cm、南三陸町で75cm、気仙沼市で74cm、石巻市旧北上川沿いで70cmになり、月2回の大潮の日、海水が浸入し、住民の日常生活に困難を強めている。



仙台市若林区荒浜地区 深沼橋

3. 巨大津波の来襲

平安時代貞観11年(869)7月13日、貞観大津波地震も岩手沖から福島沖までの連動型でM8.3と推定され、

今回の津波の形態と似ているが、やや小さいと考えられている。今回は湾内施設や町並を一挙に破壊し、その凄まじさは筆舌に表現し難く、目の前にしてカメラのシャッターを押す気力も奪った。

津波の波高は宮城県平均で7.2mであったが、気仙沼市本吉と女川町で19.6m、南三陸町で15.4m、仙台新港で14.4m。内陸部への海水の侵入は大～小河川を遡上し、石巻市の旧北上川、北上川で8km、名取市と岩沼市の阿武隈川と沿岸で6km、東松島市と仙台市の沿岸部で5km町並や沿岸地帯の23,000haあった農耕地の78%を壊滅させ、農漁民の命を奪い去った。

県内の水田への海水冠水面積は12,750haに達し、東松島市で81%、石巻市で78%に冠水、園芸作物の産地の被害も大きく、南三陸町のキク、石巻市のトマト、仙台市の夏レタス、名取市のバレイショ、亶理町と山元町のイチゴがほぼ全滅した。キュウリ、ナス、ニラ等の産地は維持された。

杉材の主産地である三陸地方では、海岸に近い杉林で塩水害が起き、枯れはじめて倒木などによる二次災害が心配されている。

放射線による稲藁汚染で肉用牛33,000頭の出荷停止。新米への影響や風評被害への心配等農業を基幹とする県には大きな痛手である。

4. 市町村の被害と報道

気仙沼市、南三陸町、仙台湾沿岸地帯の仙台市、名取市、岩沼市、亶理町はよく報道されているが、最も被害の大きい石巻市、女川町の報道が少なく、特に牡鹿半島の小集落や東松島市の野蒜、宮古島状況は全く不明である。野蒜では幅500mもあった防潮林が流され走っていた仙石線の電車4両をも流したという。松島町と塩釜市は松島湾内の島々が防波堤代わりとなって、最小限度の被害に留まった。

宮城県全体の建物の総被害額は3兆3714億円と推定されている。



仙台市若林区荒浜地区 貞山運河

5. 復興活動のきざし

瓦礫の撤去、避難住居の建築、ライフラインの復活等とともに住民のやる気もでて、各県の市民ボランティア

の力も借りて、借店の再開、名物食品の製造、魚市場の再開、縮小した祭の開催等徐々ではあるが動き出した。しかし、完全復興には何年かかるか解らない。

支部長 永山 忠明

【福 島 県】

◦「東京電力原子力発電所が爆発」

3月11日の地震は、マグニチュード9、震度7で、大きな津波を伴いました。

本県の浜通りを中心として、死者・行方不明者合せて、2,037名、住宅被害が、181,164棟となりました。

更に困ったことには、大熊町にあった、東京電力の福島第一原子力発電所の爆発事故により、放射性物質のセシウムが、浜通りを中心に県内に飛散したことであります。

このため、濃度の高い地域の住民が、地域を離れ、県内外に49,000人ほどが、避難せざるを得ない状況となりました。

又、放射性物質は、農林水産物からも検出され、濃度の高いものは廃棄処分とされており、低濃度の桃や梨も風評被害で出荷できない状況にあります。

これ等の損害額は、東電と国で補償することになっており、賠償額は最終的に、数兆円になるものと見込まれております。

福島県支部長 佐藤 豁 (農34)

【茨 城 県】

◦茨城県における被災状況について

去る3月11日に発生した東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様方に心からお見舞い申し上げます。

さて、我が茨城県下においても、報道等ではそれ程取りあげられておりませんが、14時46分発生M9.0の三陸沖地震と続いての15時15分発生M7.7の茨城県沖地震により、長時間にわたる立ってられないほどの激しい揺れと最大波約4mの津波に襲われ、全県的に甚大な被害を受けました。被害の概況は次のとおりです。

- ・電気水道 44市町村中43市町村で停電、39市町村で断水、
- ・道 路 高速道及び国道道の損壊472ヵ所、各地で通行止め、
- ・鉄 道 路盤崩落、流出などによる全線不通
- ・住 宅 全壊約2千戸、半壊約1万4千戸、一部損壊約13万戸
- ・ピーク時の住民避難 77,285人 (40市町村594ヵ所)

農水産業について詳しく申し上げますと、水産業では、津波により北茨城の大津港をはじめ県内主要漁港で漁船被害466隻 (漁船総数の約1/4)、市場、冷蔵庫等166施設が被災、農業では、液状化や塩害などの農地被害で水田の作付け不能地約700ha、用排水等土地改良施設の損壊1,804地区のほか、農業倉庫等共同利用施設など、県全域で深刻な被害が発生しました。



液状化水田

さらに、福島第一原子力発電所の事故は、県内全域に放射性物質の汚染をもたらし、農畜産物の出荷停止に加え風評被害と農水産業に与えた影響は極めて甚大かつ深刻です。半減期の長い放射性セシウムは落ち葉や堆肥、さらには農業集落排水施設の汚泥に高濃度で検出されるなど様々な形で目に見えない被害をもたらし、長期的に注意深い対応を強いられる状況となっています。

現在、「がんばっぺ! 茨城」(缶バッジ、うちわ等のロゴ入りグッズ有り)を合い言葉に、当面の仮復旧から本復旧へと県下全域で復旧復興に向けた取り組みが急速に進められています。

特に、農林業関係については県や市町村、各農林業団体等で多くの支部会員が復旧・復興作業に携わり、一日も早く元気な茨城に戻れるよう、日夜頑張っています。

最後に、本県産農畜産物は逐次放射線検査を実施し、安全なものが出荷されていますので、どんどん食べて応援よろしくをお願いします。

茨城県支部 事務局 後藤 四朗 (経院55)



がんばっぺ茨城

●被災地同窓生からの便り

被災地同窓生から同窓会長宛あるいは教員宛に送って下さった、一部のはがき、手紙の内容を抜粋、編集等しましたのでここで紹介します。括弧内には卒業年と居住する市区町村名を記入しました。

◆青森県

- 八戸市は、津波の高さが2.7mから高い所では6m余りでありました。幸いにして、私の居住地域は、太平洋岸から2kmぐらい離れていたのと、堤防等により被害は、全くありませんでした。被害を受けた地域は、海岸近くの水産関連会社、飼料会社、石油ターミナル、火力発電所、精錬会社、製紙会社、漁港、フェリー埠頭および漁船、一般住宅等です。地元新聞によると、青森県内の震災被害額は、1千億円を超える見通しだそうです。
(昭53卒 八戸市)



◆岩手県

- 峰ヶ丘同窓会会長名での東日本大震災に対するお見舞い誠に有難うございます。私の住む盛岡は大地震後数日間、電気が止まった程度ですが、三陸沿岸は報道されているとおりです。
(昭40卒 盛岡市)
- 我家は被害の少ない地域のため家族も家も無事で、皆元気しております。まだまだ厳しい状況ですが、力を合わせて乗り越えて行きたいと思います。
(平11卒 大船渡市)



◆宮城県

- 私の家は海岸と山の中間に位置しておりますので、地震の被害はありましたが、津波の被害はありませんでした。家族も無事でしたが、知人の多くが死したり今も行方不明で、復旧復興はこれからが大変です。政府の対応には皆イライラしています。
(昭58卒 黒川郡大衡村)
- 宮城県内には、同級生が3名在住しておりますが、おかげ様にて全員家族共々元気しております。会長様からの励ましを糧に頑張ってお参ります。(昭43卒 仙台市青葉区)

- 幸いわが身と家族は無事でありましたし、自宅マンションも大した被害もなく、また、務めている会社の方も大きな被害を受けずに済みました。復興にはまだまだ時間を要しますが、家族、会社の仲間、地域の皆さんと手を携え、希望をもってつき進んでいく覚悟しております。
(昭42卒 仙台市青葉区)

- 物損は少しありましたが親族に人災はなく今は余震におどろかされながら過ごしています。人災は元にもどせませんが、人の心、町並みは全国、全世界のご支援をいただいてとりもどせるものと思っています。
(昭37卒 柴田郡柴田町)

- 仙台都市部は被害が少なく済みましたが、松島方面の海岸地帯に津波の被害があり多くの人達が死亡いたしました。知人夫婦もその犠牲になり冥福を祈っています。
(昭31卒 仙台市青葉区)



◆福島県

- 震災の御見舞いを頂き有難うございました。母校同窓会の強い絆をいつも痛感していますが、今回は格別に胸の熱くなるものがあります。私の所はいわき市の北部、原発から34.5キロ、海から5.6キロで被害は古倉の煉瓦が崩れた程度でしたが、海沿いではそれこそ阿鼻叫喚というのでしょうか、目をそむけたくなる惨状でした。
(昭26卒 いわき市)
- この度は過般の東日本大震災、そして今なお収束に明るい展望がない現状に心からのお見舞いと励ましを頂き誠にありがとうございました。今回の人的、物的被害は、原発の事故による汚染もさることながら、地震や津波による地球的要因による東日本の被害であることに、計り知れない不安を禁じ得ない次第です。
(昭28卒 福島市)

- 震度6強を記録した白河市は土砂崩れで12名の死亡者を出しましたが、自宅がある新白河地区は地盤がよくなったのか、家屋の被害無く、水道電気のラインも直ぐ復旧し、生活に大きな支障はありませんでした。今後は残り少ない人生を放射能とつき合いながら暮らす他は無いなと考えております。
(昭24卒 白河市)

- 原発の地元であるため三重苦を背負われている状況です。五月下旬より在住する伊達市の名前も報道されるようになりました。先の見えぬ現状を見るにつけ落ち着かぬ心境です。
(昭29卒 伊達市)

・今回の地震、津波による被災は、浜通り地方を中心に想像以上の大被害を受けました。私も、同時に発生した東電原発第一の被災現場には入れませんが、その他の地域には足を踏み入れたものの、海岸沿いの標高約5～6m以下の水田地域はすべて海水の侵入があり、すべて耕作不能地域となりました。圃場整備を終えていた優良なる水田が津波による浸水を受け海砂（いや海底の泥です）の堆積、破損した家屋の残材が散らばり、声が出ないくらいの有様でした。津波により被災した施設、農地の除塩工事は、標準工法では不可能です。今後長時間を要するでしょうが、現地にて技術指導をしていきたいと存じています。（昭43卒 福島市）

・一時、農業高校に勤務したときの教え子二名が地震水害で亡くなり、涙がとまらず合掌のしどろしどろでした。（昭26卒 南相馬市）

・私の地元である飯舘村は計画的避難エリアとなり、故郷がなくなる不安や苦しみを耐え、私自身も地元のために自分が出来ることに注力していきたいと思います。（平18卒 東京都江東区）

・ライフラインの機能がストップし、数日後に回復しましたが、その頃原発の爆発事故が発生し子供達の所に避難を兼ねて滞在もしましたがいまだに終息せず不安な日々を送っています。（昭38卒 福島市）

・新緑まぶしい宇大農学部キャンパスの写真に勇気づけられました。宇大のOBで良かったと思えた瞬間でした。

福島県は現在地震、津波の被害に加え東京電力第一原発事故、そして風評被害と四重苦に見舞われております。とりわけ原発事故が福島県復興の大きな障害となっております。

3月11日以来福島県民は災害に対する不安、東京電力及び国に対する怒りそして全国の皆様の温かい有形無形のご支援に感謝する日々を過ごしております。不思議なもので震災・事故があってから、前から好きだった福島県が以前にも増して大好きになりました。微力ながら福島県を何とかしたいと思う日々です。

（昭60卒 郡山市）



◆茨城県

・地震により家は少々傾き、壁にはひびがたくさん入りました。ベランダの鉄柵はあめ細工のようにねじれました。微妙な壊れ方です。茨城は、大災害は少ないのですが、岩手、宮城、福島にかくれて、大災害でも、あまりニュースになりません。壊れかけた家の中で日々を元気に過ごしています。（昭45卒 水戸市）

・日立市は震度6強の激しい揺れとその後発生した4mの津波により大きな被害を受けましたが、幸いにも自宅は海から少し高くなっており、津波による被害は免れましたが、地震の揺れで屋根瓦、外内装、基礎、塀など結構やられました。まいったのはライフラインが数日間全てストップしたことで、特に水がないというのは相当にこたえました。（昭45卒 日立市）

・幸い我々内陸部は屋根瓦の落下、石塀の崩壊等ですみました。私も鹿島地方から北茨城迄、海岸線を視察いたしましたが、かなりの被害でした。そして今放射線の恐怖に脅えております。（昭35卒 下妻市）

・発生から2ヶ月経った今でも大きな余震が続き不安にかられます。当地でも断水、停電、液状化などによる交通ストップ等が続きましたが幸い私のところは最小限の被害ですみました。（昭35卒 水戸市）

・屋根瓦の崩落、自家水用ポンプのタンクの倒壊や壁の亀裂、崩落また雨漏りの発生、道路の陥没、電柱の傾きなど未だに手つかずの所があり復旧のメドなど立たない状況もありますが取り敢えず日常生活には支障のない状態にまでこぎつけて居ります。（昭20-21卒 鹿嶋市）



東北地方太平洋沖地震被災
学生支援等への義援金について
(報告)

2011年3月、「ホームカミングデー報告書」が、当日（2010年4月29日）に参加された皆様に送付されました。その中に、進村武男宇都宮大学長より、「宇都宮大学同窓会義援金」（足利銀行峰町支店に開設した口座名）の募金への支援の訴えが同封されました。

この義援金募金は、4月末日で締切られ、総額は2,230,120円に達しました。進村学長は、卒業生・修了生の皆様をはじめ、学生及び教職員の皆様から多大なるご協力を頂き感謝します、との御礼と報告がありました。

義援金は、本学被災学生への修学支援、学生・教職員のボランティア活動などによる被災地支援及び復興支援のために活用させて頂きました、とのことです。

あの日の記憶

農業経済学科平成10年卒業生

3月11日は名取市にある宮城県農業高等学校で勤務中でした。その時のことを覚えているままに書きたいと思います。

2時46分に地震が発生し、職員室にいた私は揺れの強さと、長さに慌てて外に飛び出しました。立てひざで揺れが収まるのを待っていました。その日は授業日ではなかったのですが、春の実習や部活動で約130名の生徒が活動していました。

大津波警報が発令されたため、自分のクラスで実習に来ていた生徒と顧問をしているボクシング部の生徒に対して、貴重品を持って校舎3階に上がれと伝えました。津波の予想時刻になっても海のほうに変化が見えないこと、昨年の大津波警報発令の際に波が来なかったことを先生方と話し、今回も来ないのではないか？あるいは来て大したことは無いと根拠も無くこの事態を楽観していました。

しかし、学校長からしばらく3階で待機すると言われたこと、生徒の携帯電話のワンセグで気仙沼などがのまれていくのを見たことなどで緊張感が徐々に強くなり、教職員は長期戦に備えるため、1階に戻り毛布やストーブなどを3階に運ぶことになりました。

その途中で、学校周辺に帰宅途中の生徒がいるのではないかと心配になりました。地震が来る10分くらい前にボクシング部の2年生の生徒が徒歩で帰宅するのを見ていたからです。

そのため、校内のことを他の先生に任せ、車に乗り校外に出ようとして100mほど走りました。そのとき、右側から水門を越えてくる波を見ました。それで校舎に引き返そうとしたら今度は校舎と体育館の通路を越えてくる黒い波を見ました。校舎に戻ることはできないと思い、また外に必死で逃げました。途中、バックミラーに黒い波が追ってくるのが見えました。

とにかく、海から遠く、高いところを目指しました。途中ですれ違った車がありました。自分が逃げることに必死で危険を伝えることができず、とにかく車で走りました。美田園駅というところで生徒2名を見つけ車に乗せ、さらに走りました。生徒たちは津波が迫っていることを知らず、車のテレビを見せると学校の近くにある仙台空港が津波にのまれる姿が映し出されました。

イオンモール名取エアリの屋上駐車場に車を止め、海のほうを生徒と見ていると、雪が降ってきました。さらに、海辺の松林を越えて白波が来るのが見えました。学校はもう駄目だろうと思いましたが、当時、学校にいた先生に聞くとその波は奇跡的に消え去ったということでした。学校に残っていた教職員と生徒合わせて約200名は、屋上の上にある貯水槽に上って備えたそうですが、ほとんどの人が死を覚悟したそうです。また、外で後片付けをしていた職員は木にしがみついて、牛舎にいた職員はサイロによじ登って、100周年記念館に残っていた生徒と教員は渡り廊下の屋根に登って、それぞれ無事だったということでした。

その後、生徒とともに避難所である市民体育館に移動しました。他の生徒が既に来ており、避難所設営の手伝いを

していました。我々もその手伝いに参加し、水汲みやお茶だし、家族の安否確認に来る人の一時対応をしました。体育館の職員の皆さんも停電等で情報がつかめていない様子で、誰もが不安を抱えて生活していました。

翌日の昼ごろに、一緒にいた生徒たちを車に乗せて家まで送り、その後自宅に帰ることができました。家族や自宅も無事でした。また、学校にいた生徒や教職員は全員無事で、翌日の午前中に自力で校舎を脱出したということでした。

今回の震災により、学校は校舎1階が完全に水没し、2階の床上30cmまで浸水しました。田畑や温室などの農場施設は流失や冠水などで壊滅的な状態、その日、学校にいた教職員



津波襲来時の生徒昇降口

の自家用車約70台も流失しました。生徒では、自宅等にいた生徒のうち、新3年生2名と、3月に卒業したばかりの生徒1名が津波で死亡。保護者では両親共に死亡した生徒が3名、両親の片方が死亡した生徒が7名。家屋の全壊、半壊等は100名以上になりました。約700名の生徒のうち3名の生徒を失ったことは、非常に残念でした。

学校施設が壊滅的な被害を受けたことにより、その場所で授業を再開することは断念することになりました。他の学校に間借りをしながらの授業となりましたが、700名を一斉に受け入れられる高校はありません。そこで食品化学科と生活科は亘理高校、農業科・園芸科の2・3年生は柴田農林高校、農業科・園芸科の1年生と農業機械科は加美農業高校と県内の3つの学校に分割して授業を行うことになりました。9月には名取市高館にある宮城県農業・園芸総合研究所、宮城県農業大学の敷地内に仮設校舎が完成する予定でそれまでの措置ということになりました。

その中でも、加美農業高校は名取市からかなり遠いため、毎日バスで約90分かけて登校します。登下校のバスの車内で1時間目と6時間目の授業を行うという状況で、生徒も教員もなかなか困難な状況となっています。

この3校分割授業は、5月9日から開始されました。私も亘理高校で授業を開始しました。2校の時間割の調整や体育館が避難所となっていることから授業実施でも問題を抱えながらのスタートです。

しかし、これを乗り越えることで、自分自身も生徒たちも成長できるのではないかと思います。それを生徒に伝えつつ、自分に言い聞かせながら生活していこうと思っています。(この文章は平成23年5月の時点で書かれたものです(編集者))



津波で打ち上げられた自動車

● 大学としてのボランティア派遣支援活動

理事・副学長（教育・学生担当） 石田 朋靖
（元農業環境工学科）

現地のおい ～派遣するに当たって～

サン、テン、イチ、イチ……大学として何が出来るか、大学の存在意義が問われている時だと思った。何度も自問を繰り返す中、こうした時にTVの前で佇むしかない人間を育てるのであってはならないとも思った。そうしてツンドラや砂漠から熱帯林まで、汗と泥まみれになりながら研究の現場を彷徨い、そこでの発想を大切にしてきた者としては、学生達に、まず被災地に立ち、その“おい”の中で何かを感じて欲しいと願った。

ボランティア活動に造詣の深い先生達と学生支援課長に連れられ、4月の半ばに石巻市の雄勝地区に立った。瓦礫の中に見つけた、AKB48のアッチャんのシールが貼ってある“2年×組 ××もえ”ちゃんのピンクの筆箱が、そこにあったはずの生活を生々しく思い起こさせる一方で、地面には蟻もミミズも、空にはカラスの姿すらも見つけることが出来ない世界。その時に感じた息苦しさは、後に2度の悪夢を引き起こすことにもなった。TVの画像からでは決して感じる事が出来ない“現地のおい”であり、馬齢50半ばの男の人生観を変えてしまう衝撃であった。その中身を言は控えよう。ただ一人でも多くの学生に現場に立って欲しいと切に願った。

宇都宮に帰った翌朝、進村学長は学生ボランティア派遣の意味を一瞬のうちに理解して全面的に支援して下さいました。加えて学生支援課職員の熱意に支えられ、10日後には3日間にわたる延べ138名の学生と17名の教職員による“弾丸ボランティア”を派遣することが出来た。

サン、テン、イチ、イチ……学生諸君は、それぞれの24時間の中で何を感じ、何を持ち帰ってきたのだろうか？聞いてみたい気もするが、敢えて問うまい。それぞれの中に刻み込まれた“現地のおい”が君たちをどう育てるのか、是非とも見守ってみたいと思っている。

東日本大震災関連災害ボランティア活動の記録

4/28～5/1に大学が企画したボランティアでは、活動の効果を上げるため、出発前の事前学習や実施後の“ふりかえり”学習を行った。こうした中で学生自身による自主的な企画が提案、実施されるようになってきた。嬉しいことである。学生による災害ボランティア活動の主なもの以下のようなものである（7月末まで）。

なお、活動のための借り上げバス等の交通費や機材の購入には、学内構成員や同窓会からの義援金、峰ヶ丘地域貢献ファンドを使用させて頂きました。厚く御礼申し上げます。

企画・主催等	活動期間	参加数	活動場所	活動内容
学生支援課	4/28 ～ 5/1	155 (教職員17)	宮城県 石巻市内	高校・幼稚園等の泥出し (22:00発 0泊 2日×3回)
ボランティア学生有志 キャンパス	6/3 ～ 6/5	21名	宮城県 七ヶ浜町	海岸のガレキ撤去 (2泊3日)
鬼怒川スマイル プロジェクト	6/18 ～ 7/30	8名	鬼怒川温泉 避難所	避難した子供への 学習支援
学生プロジェクト (学生支援課の支援)	7/16 ～ 7/18	139 (教職員13)	宮城県 石巻市内	個人宅等の泥出し (3:00発 日帰り×3回)



● 学生ボランティア参加

3月11日

生物生産科学科 3年 相澤 昂洋

3月11日午後2時46分、それは突然やってきました。異様な地響き、うねる道路、周囲の建物は倒れんばかりに揺れ、塀や石像はいともたやすく崩れていきます。「東日本大震災。」地震そのものの威力もさることながら、津波や原発事故という二次災害を引き起こし、日本に甚大な被害をもたらしました。この日、この瞬間、いったいいくつの命が奪われたことでしょうか。そしてこの先どれほどの年月、我々日本国民はこの震災と向き合っていかなければならないのでしょうか。この問題に対して、私たちができることは何でしょうか。

観測史上最大の揺れが日本を襲ったその時、私は友人と地元の茨城県にいました。茨城とはいっても、私の暮らしていた古河市は県内でも内陸の方に位置するために津波の心配もなく、地震自体も沿岸部ほどの被害はありませんでした。しかしそれでも築年数の長かった我が家を半壊にまでさせ、私たち家族は現在住む埼玉への転居を余儀なくされたのです。そんなこともあってか、ニュースなどで流れる被災地の映像を他人事とは思えませんでした。そうでなくとも宇都宮大学に入ってから東北出身の友人も増えまし、何より同じ日本に住む仲間として、じっとしてはいらなかったのです。そんな時、宇都宮大学で学生ボランティアを募集するという話を耳にした私は、これに申し込むことに決めたのです。

テレビで観るのと自分の目で見るのは違うもの。活動の当日、被災地に足を踏み入れた私は、現地の状況を見て言葉を失いました。ほぼ手つかずの市街地はとても震災が起きてから1カ月以上が経っているとは思えませんでした。私たちが作業をすることとなったのは、そんな被害の大きかった沿岸部から少し離れた内陸にある幼稚園。内容は地震により荒れてしまった園内の清掃です。作業はさして難しいものでもなく順調に進んでいきました。特に何事もなく、物足りなささえ感じていた私でしたが、ただ印象に残ったことがあります。作業も終盤に差し掛かったころ、副園

長さんが話しかけてきたのです。彼女は言います。「みなさんが来てくれて本当に助かりました。ありがとう。」さらに別れ際には私の手を取り涙まで流してお礼を言うその姿に、自分の目にも同じものを感じたのを覚えています。その涙は同情などではなく、感謝から出たものでした。ボランティアをしていて1番の不安なこと。それは自分がしていることは本当に正しいのかということです。実際、現地の方から厳しい声をいただくこともあります。それでもたった「ありがとう」の一言で、来てよかったと感じることができました。お礼を言われて、感謝されて、それで救われたのは私たちの方だったのです。

実際に被災地を訪れてみて感じたこと、それは個人の無力でした。しかし同時に気付かされたこと、それは人の可能性です。困難な状況にあっても温かくたくましかった東北の方々。その姿が、協力し合うことの、つながることの強さを教えてくれたのです。過去に類をみないほどの規模の災害。だからこそ、私たち人間がかつてないほど強固につながり、ことに当たっていかなければならないのだと思います。

遅くなりましたが、震災被害者のご遺族の方々には深く追悼の意申し上げます。また、今回のような機会をくださった宇都宮大学や関係者の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。最後に、他にも同じ思いを持って被災地を訪れたボランティア参加者のコメントを紹介して終わりたいと思います。

「私が訪問した石巻の住宅は震災から約4ヶ月経っても未だ手付かずの状態でした。実際に被災地に行ったことで、まだ震災から4ヶ月しか経っておらず、復興にはとても長い時間が必要だと再認識することができました。被災地に行って何かをすることというのは、そう簡単なことではないので、募金や節電など宇都宮で私にもできることをしていきたいです。(生物生産科学科 1年 匿名)」

「私は今回のボランティアで初めて津波の被災地に足を踏み入れたのですが、現場を見た瞬間言葉を失いました。本当にこ



ボランティア活動の様子



災害ボランティアに参加した学生たち

の場所に人が住んでいたとは思えないほど跡形もなく、人が生活出来るような環境ではありませんでした。今回の活動を通じて、被災地の復興には人の力が必要だと改めて感じました。これからもこのような機会があれば、積極的に参加して行きたいです。(農業経済学科 2年 亀田久美子)

「震災の傷痕を目の当たりにして、最初、言葉を無くしてしまいました。その中でも、被災地の方々は私達にとってもよくして下さいました。実際、被災地の方々のお手伝いをしに行ったのに、逆に私達の方が得るものが大きかったかもしれません。日本人の力強い心を学びとった貴重な経験になりました。(生物生産科学科 3年 武市和香奈)」



***** 宇都宮大学学務部よりお知らせ *****

日本学生支援機構 (旧・日本育英会) の奨学金を返還している方へ

奨学金の返還中の方で、返還が経済的に困難な場合は、「奨学金返還期限猶予願」もしくは「奨学金減額返還願」を日本学生支援機構に提出してください。(東日本大震災に被災された方のうち、災害救助法の適用を受けない近隣の地域であっても、同等に被災された方や勤務先が被災した方については、返還を減額・猶予できる場合があります。) 詳細については、日本学生支援機構のホームページをご覧ください。奨学金返還相談センターにご相談ください。

独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) (旧・日本育英会)

ホームページ (パソコン用) <http://www.jasso.go.jp/>

モバイルサイト (携帯電話用) <http://www.daigakuic.jp/jasso/>

日本学生支援機構奨学金返還相談センター

電話：0570-03-7240 (ナビダイヤル)

※ PHS、一部携帯電話、IP電話からは03-6743-6100へおかけください。

※ 受付時間：8時30分～20時00分

※ 月曜～金曜 (土日祝日・年末年始を除く)

退職の挨拶



柳沢 忠

生物生産科学科 応用生物化学講座
生物有機化学研究室

昭和55年4月から平成23年3月までの31年間、講師、助教授、教授として、卒業論文学生約180名、大学院修士課程院生約80名、大学院博士課程院生約10数名の教育研究を指導してきました。(農産製造学)、農産物利用学、生物有機化学と研究室の名前は変わりましたが、宇都宮高等農林学校時代から存在していた教育研究分野です。

生物有機化学は (1)ビタミンやホルモンなど生物活性物質は生物(微生物、植物、動物)によりどのような経路で合成されるのか? (2)作られた化学物質(内因性物質)はどのようにして生理作用を發揮するのか? (3)なぜ他の生物に影響を与える(外因性物質、薬理作用を示す)のか?

複雑に見える有機化合物をこの3つの観点から見つめ直し、有用生物の生命の仕組みを理解することから始めます。農学部で化学を学ぶ意味が、(農林水畜産業の)生産物の利用(ポストハーベスト)から始まりましたが、現在は直接的な食糧の生産(プレハーベスト)や貯蔵法、流通、調理法にまで広がって来ています。さらに、これら活性物質の発見に至る研究法(生物検定法、単離精製法、化学構造決定法)と作用機序の(免疫学的手法および遺伝子工学的手法を使用しての)動的な研究法を講義してきました。

(研究内容)天然生理活性物質の化学構造と生理作用、特に甲状腺軸ホルモンについて。動物の成長と生殖は、脳(視床下部)-脳下垂体-各臓器(末梢器官)の3段階のホルモンによって制御されています。環境から得られた情報を脳で受けて、この制御機構が動き出します。日光中禅寺湖産のヒメマスを研究材料に降河行動(中禅寺湖菖蒲ガ浜にある農水省の養魚試験場から中禅寺湖に(海と見なして)降る)と遡上行動(産卵の為に生まれ育った養魚試験場に昇る)を制御する仕組みの解明を研究課題としてきました。



田中 秀幸

生物生産科学科 応用生物化学講座
生物化学研究室

ことしの3月末日、定年辞令で宇都宮大学を解職されました。昭和39年4月に農学部農芸化学科に入学して以来、5年間を他所で過ごしたことを除き、これまでの人生のほとんど大半を宇都宮大峰キャンパスで過ごしたことになります。

赴任した当初には、大学紛争で教授会の学外開催、機動隊導入などが未だ続いていました。

助手の期間は、学生実験と卒論実験指導補助が主任務で

した。その当時の学生実験の内容は、学生ひとり一人に、強い酸性液、強いアルカリ液、ジエチルエーテルなどの有機溶媒やガラス器具の取扱いを経験してもらうことに主眼がありました。フラスコが砕けて濃硫酸と濃硝酸混液が飛散し白衣がボロボロになったり、毛髪加水分解液が突沸して天井を焦したり、いろいろな事件が起こりました。このような危険な学生実験には強い抵抗感があると思いますが、化学実験には想定外の危険があることを察知しそれに対処する能力はそれなりに養われたかも知れません。

卒論研究指導では、「アミノ酸炭素骨格代謝の栄養的意義」を研究テーマに院生・学生のグループで20年間ほど継続していました。種々の栄養条件下で飼育したラットに放射性炭素標識アミノ酸を投与してのトレーサー実験です。夜行性のネズミを使用したこの実験は、食餌を摂取させたあとに時間を追って分析試料を採取するため、ほとんど徹夜状態で作業をおこないました。「同じ釜の飯を食う」的な作業の楽しみも経験したけれども、1週間も続くと肉体は疲労困憊。

教員生活の後半は、西宏教授と「コラーゲンの異化代謝」を、菅原邦生教授と「アミノ酸による摂食調節」を、杉田昭栄教授と「遺伝性視神経欠損ラットの代謝リズム」を共同研究してきました。

これまでを想うと、生来の我儘で独善的な性格の所為で、多くの学生・院生、同僚、周囲の人たちに迷惑を振りまいたと思いますが、私としては楽しみながら働くことができました。お付き合い下された皆様に深謝いたします。



中島 教博

農業環境工学科 食品流通工学研究室

定年退職を迎える直前の3月11日に東日本大震災が発生致しました。翌日の12日には私の最終講義および定年退職記念パーティが予定されており、その準備をしていたとき、これまでに経験したことがない大地震が発生しました。そしてそれ以後のイベントはすべて取り止めになりましたが、それどころか両毛線や東武宇都宮線が全く動かず、ガソリンも手に入らず、大学にろくに行けない日々が続くうちに3月31日の退職を迎えてしまいました。今後決して忘れることの出来ない年になるでしょう。

教員として39年間、そして昭和39年に宇都宮大学に入学し、学部、大学院、技術補佐員の6年半を加えまして45年6ヶ月の長きに渡りまして宇都宮大学にお世話になりました。18歳で宇都宮大学に入学して以後、65歳で定年を迎えるまでの47年間で宇都宮大学を離れたのは東京大学に研究生として籍を置いた僅か1年半だけでした。

近隣の農学部志望であったことから高校の担任教師の勧めもあって宇都宮大学に入学し、それが縁でこのように長きに渡り宇都宮大学にお世話になり、その大半を宇都宮大学で過

ごさせて頂きました。入学当時、このように長きに亘って宇都宮大学でお世話になるなど思いもよらぬことであつたでしょう。このような私が長きに亘り宇都宮大学にお世話になって、勤め上げることが出来たのは皆様方の暖かいご協力のお陰と大変感謝しております。私は昭和47年4月農業開発工学科、農業動力学研究室の助手として赴任致しましたが、仕事の内容は39年間に前半と後半に分けることができます。前半の昭和期には農業動力学研究室において20年近く内燃機関に関する教育研究を行い、後半の平成期は食品流通工学研究室の教員として青果物の鮮度保持、品質評価に関するテクノロジー分野で教育研究を行って参りました。

また、旧講堂改修の時期に同窓会の常任理事（会計担当）を務めさせて頂いたのも思い出の一つです。旧講堂改修が大学主動で行われるにもかかわらず、大半の資金を峰ヶ丘同窓会が負担することで計画が開始されたため、大学の財務部長などとの度々の話し合いや色々な事項に携わらせて戴きました。本当に同窓生の悲願が実現して良かったと思うとともに同窓会の皆様方の多大なる資金のご協力に感謝しております。

加えて、先にも述べました東日本大震災の翌日に計画されていた定年退職記念パーティは5月に延期して開催して頂きました。開催にご協力いただきましたスタッフおよびお忙しい中ご参集頂きました卒業生の皆様には大変感謝しております。

私も今後は寺の住職としてまだ頑張っていく所存です。これまでのご厚情本当に有り難うございました。

最後に、同窓会の皆様方の益々のご活躍、ご発展をご祈念申し上げます。



内藤 健司

森林科学科 森林計測・計画学

昭和53年9月に宇都宮大学農学部に世話になって以来、個人的には結婚、子育てなど多くの事がありました。大病もせず定年退職まで農学部で仕事を続けることができたのは、先輩諸先生を始め、皆様方のお陰と心から感謝致します。年度末が近づいて忙しく、また例年にない大雪の中、私の最終講義に駆け付けてくれた多くの卒業生の皆さんと再会し、改めて長い歳月の経過を感じました。

退職して改めて感じさせられることですが、森林・林業・林産業の現場が近くに在るという宇都宮大学の教育・研究環境と、緑豊かな自然に囲まれた生活環境は素晴らしいものでした。

北海道小樽に生まれ、その後、東京、旭川、再び東京、筑波、宇都宮と生活の場をいろいろ変えてきましたが、栃木県に来てから、既に我が人生の半分以上を占める33年余りが経過し、終の棲家も宇都宮に定めました。退職後は栃木森林認証協議会などの活動をとおして、地域林業振興のため、少しでも貢献できればと考えています。

平成の時代になり、学部改組、国立大学法人化と大きな組織改革が続き、それに伴って教育・研究予算の削減や職務内容の多様化という厳しい環境変化が生じました。これからの宇都宮大学を担う学生・教職員の皆さんにとって厳しい現実ですが、流行を追わず、目先の成果にとらわれず、実践的な教育・研究という宇都宮大学農学部の歴史と伝統

を守り、恵まれた教育・研究環境を活かした教育・研究活動の益々の発展を心から期待致します。

退職間際になって発生した東日本大震災による被害は、半年近く経過した今も復興の目処が立っていません。東北各地の産業界や地方行政機関で働く多くの同窓生の皆さんには心からお見舞い申し上げます。最後になりましたが一日も早い復興と皆様のご活躍をお祈りいたします。

長い間お世話になり有難うございました。



重川 弘宣

雑草科学研究センター 植物機能解析学

同窓会の皆さま、如何お過ごしでしょうか。さて、私は、昭和50年1月1日付けで農学部附属雑草防除研究施設助手として峰ヶ丘の仲間になり、この平成23年3月定年退職の日を迎えました。長きに亘る教員生活を大過なく無事に勤められたことを、皆様に感謝し、厚くお礼申し上げます。

峰ヶ丘に36年ともなると様々な思い出が浮かんできます。着任当時の宇都宮大学は全国的に派生した学園紛争の余波がまだ収まらず、落ち着かない日々でした。授業もままならず会議も学外で行われる状況でした。落ち着きを見せたのも束の間、昭和60年代に入り全国的に農学部見直しの機運が起こり、わが農学部は最後尾の平成3年に現在の体制に再編されました。雑草研も農学部附属から大学附属教育研究施設「雑草科学研究センター」に改組され、その後2度の見直しを行い、「野生植物科学研究センター」、「雑草科学研究センター」と名称が変わりました。

この改組により教育体制も大きく変わり、有機化学教育では新学科「生物生産科学科」に1年生全員の基礎教育科目「基礎有機化学」が新しく開講されました。その誕生には当時の学科重鎮の教授の英断によるところが大きく、生命科学を柱とする新学科では、全ての学生に化学的素養が必要であるとの強い意向があり、農芸化学科の「有機化学」を担当していた重川が任に当たることとなりました。改組後20年を経た現在、「基礎有機化学」を学科必須科目にしたことの評価は、どうでありましょうか。

これまで農芸化学科の「農薬化学」、「有機化学」、改組後は生物生産科学科の「基礎有機化学」、「有機化学Ⅰ」と「有機化学Ⅱ」という有機化学関係の教科を担当する機会をいただき、授業を通して多くの学生達と触れ合い交流することができました。満足のいくものであったかは疑わしいのですが、少しでも役に立ったという学生がいれば教師冥利に尽きます。

雑草研では除草剤科学を中心とした研究に勤しみました。竹松哲夫先生の情熱に満ちた農業に役立つ農学研究、生き物から教えられる新しい生命現象、それらを実体験として峰ヶ丘で研究生生活を送れたことに感謝しています。

3月11日には東日本大震災と原発事故が起きました。大災害は、一人ひとりが、命、生き方を考えさせられる契機となりました。

同窓生の皆さまの身を案じつつ、益々のご活躍を祈念しております。

新任教員あいさつ



まつい まさみ
松井 正実

所属・職種：農学部 農業環境工学科
准教授

専門：圃場機械学

はじめまして。昨年12月農業環境工学科に准教授として着任しました松井と申します。昭和39年大阪市に生まれ、学部卒業後は農業機械メーカーで研究開発職に従事して参りました。この度、ご縁があって圃場機械学研究室を担当させて頂くことになりましたので、一言ご挨拶を申し上げます。

農作物やその生産環境に物理的作用を施す機械を対象とした圃場機械は、農業生産性の向上に大きく貢献して参りました。現代の農業生産においても、世界的な食糧需要に対応した技術開発と食品安全性の確保は、依然として大きな課題となっています。

こうした背景から、これまでのハードの研究開発を踏襲しつつ、ハードとソフトを融合した農業生産システムの開発にも拡張し、各圃場機械の高度化をはじめとして、地域の特性に応じた生産体系の構築や、各圃場機械と圃場環境の情報管理システム構築などを通して、効率的で安全かつ快適な農作業を実現し、安全な食料の増産に貢献して参りたいと考えております。

一方、これら生産システムを供給する産業分野においては、高度な知識と柔軟な応用力を備えた即戦力になりうる優秀な人材の供給が期待されています。学生の皆さんが本学卒業生として自信を持って社会に出て行けるように、高度な専門知識が自然に身につくように工夫しながら、きめの細かい指導を実践し、人間性豊かな人材育成にも取り組んでいく所存です。

最後になりましたが、本学の発展に貢献できるよう教育研究に尽力して参りますので、ご指導ご鞭撻を賜りますように、何卒よろしくごお願い申し上げます。



すぎた なおき
杉田 直樹

所属・職種：農学部農業経済学科 助教
専門：農業経営学

本年7月に着任いたしました、杉田と申します。長野県松本市の生まれで、大学入学後は東京にいました。宇都宮大学に参りますまでは、財団法人農政調査委員会で研究員として勤務しておりました。これまでは、専ら調査研究を行って参りましたが、宇都宮大学農学部の教員として、研究活動はもちろんのこと、教育や社会貢献活動などに全力で取り組みたいと思います。

私の専門分野は農業経営学ですが、現在の農家は、これまでのようにただ農産物を作るだけではなく、生産した農産物をどのように販売するのかを選択することも求められ

ています。単に農産物を生産するだけではなく、その販売戦略をいかに構築するかというマーケティングの視点が重要になってきました。実際、近年の農業経営を取り巻く環境の変化の中、規模拡大や事業多角化を積極的に進める農業経営が増えてしています。こうした先駆的な農業経営の実態を把握し、その特徴を理解することにより、地域農業の発展や、国際的な競争力に資する提言を行いたいと考えております。

具体的な研究テーマは農産物ブランドなどがあります。近年各地で取り組まれている農産物の地域ブランドを研究対象として、消費者は地域ブランドをどのように評価しているのか、また農産物の地域ブランド化がその流通構造にどのような影響を及ぼすかといった課題を明らかにしてきました。

最後になりましたが、教職員や大学関係者の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくごお願い申し上げます。



しゃ しょうなん
謝 肖男

所属・職種：雑草科学研究センター
助教

専門：植物機能解析

今年の4月から宇都宮大学・雑草科学研究センターの助教として着任した謝 肖男（しゃ しょうなん）です。わたしは平成12年に宇都宮大学の農学部に入学してから、先生方々に優しく見守られる中、4年間の学士、2年間の修士、3年間の博士、そして2年間の外国人特別研究員として、ずっと宇大で楽しく過ごさせていただきました。今年から大好きな宇都宮大学に就任することができまして、大変光栄に存じております。これからも、学生に信頼されるべく、誠意と熱意を持って教育と研究に取り組んでいきたいと思っています。わたしは現在、植物の二次代謝産物であるストリゴラクトンに関する研究をしています。ストリゴラクトンとは根圏、すなわち土壤中の植物の根の近くでは、特に発展途上国の農業生産に甚大な被害を与えている植物の根に寄生する根寄生植物の種子の発芽と、80%以上の植物種の根に入り込んで共生するカビの一種であるアーバスキュラー菌根菌の菌糸分岐を誘導し、それぞれ寄生と共生のシグナルとして働いています。同時に、植物体内では、地上部の枝分かれを制御する新しい植物ホルモンとして機能しています。植物の生産するストリゴラクトンの化学構造は多種多様であり、その多くはまだ構造が決まっていませんし、その生合成経路については不明です。わたしは新規ストリゴラクトンの構造解析を中心として、ストリゴラクトンの生理作用および生合成経路の解明を行っています。この研究の成果が、将来的には農業および園芸への利用に結びつけられれば良いなと思っています。



こだま けんじ
児玉 豊

所属・職種：バイオサイエンス教育研究センター 助教

専門：分子生物学、植物細胞生物学

本年4月にバイオサイエンス教育研究センターに助教として着任しました。専門は分子生物学と植物細胞生物学で、現在は、温度に依存した葉緑体の細胞内運動の分子メカニズムを調べています。葉緑体の細胞内運動は、植物の生存に重要な働きをしており、特に光合成活性の調節に深く関わっています。将来、葉緑体運動を自由に制御することによって、環境耐性植物の作出に役立てようと思っています。

出身は福岡県で、幼い頃は、近くの山中に探検に行き、虫や魚などを捕獲して、自然の中で遊んでいました。中学や高校では、理科や生物の科目ばかり勉強していました。大学生になって本格的に生物学研究を始めてからは、多くの研究機関でお世話になりました。これまで、佐賀県、奈良県、愛知県、福岡県、チロル州（オーストリア共和国）、インディアナ州（アメリカ合衆国）、神奈川県で生活しました。様々な土地での経験は貴重な財産になっています。そして今回、ご縁ありまして、宇都宮大学のバイオサイエンス教育研究センターに着任することになりました。

同センターは、宇都宮大学で最先端の遺伝子操作技術を利用できるように、教員や学生をサポートすることを使命としています。また高校生や地域住民が最先端研究に触れるように、一般向けの活動も行っています。これまで培ってきた実験技術や知識などを利用して、多くの方々に「生命の面白さ」や「遺伝子操作技術の有用性」などを伝えていきたいと思えます。これから宇都宮大学の発展のために精一杯頑張りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



よこやま きょうこ
横山 恭子

所属・職種：里山科学センター特任助教
専門：農村計画学・景観生態学・造園学

はじめまして、里山科学センター特任助教の横山恭子と申します。出身は大阪ですが、地元の高校を卒業してからいろいろなところで暮らしてきました。7年間の社会経験の後、大学院に進み、関東では、修士の2年間をつくばで過ごしました。その後、アメリカのウィスコンシン大学と京都大学に進み、関西に戻って約10年おりました。

京都では、博士後期2年の時に女の子を出産し、育てながら研究に取り組みました。学位授与後しばらくは、子育てに専念しており、子供が1年生になったのを契機に、神戸大学・京都大学・大阪大学で非常勤職に就きました。

わたしは、関東の風土が好きなので、この度、宇都宮大学の里山科学センターに着任させていただいたことで、再び関東で暮らすことができることを、とてもうれしく思っています。また、見知らぬところを探索するのが好きなので、在任中にいろんなところに出かけたいと思っています。専門は、造園や景観生態分野で、人と自然の関係性をおもに研究してきました。フィールドはずっと里山でした。ゴ

ミの不法投棄や景観問題など、とくに都市近郊の里山の利用にまつわる社会的な問題を取り上げてきました。

里山科学センターにおいては、里山コミュニティビジネスの創設および、里山の共同管理システムの構築という課題に着手することとなりました。里山保全にかかわる研究およびビジネスの経営の経験を活かしながら、地域貢献できるような頑張っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

新入生に対する同窓会説明会

今年度の同窓会による新入生歓迎会は中止となりましたので、4月8日の新入生学部ガイダンスの時に時間をいただき、会長と理事長による同窓会の紹介を行いました。



平成23年度 宇都宮大学 オープンキャンパス

7月24日(日)天気にも恵まれた中、オープンキャンパスが開催されました。大学全体で6,250名、農学部では1,268名の参加者があり、いずれもこれまでで最多の人数であったとのことでした。



農学部「米寿」記念 国際連携キャリア教育シンポジウムの開催

平成22年11月16日(火)に宇都宮大学生国際連携シンポジウム2010の一環として農学部では標記のシンポジウムが開催され、国際舞台で活躍している農学部卒業生、国外7名、国内2名による講演、パネルディスカッションが行われました。引き続き峰ヶ丘講堂において懇親会が開催され、和賀井会長による挨拶、鏡開き等も行われました。なお、このシンポジウムでは、大学院や学部の学生が主体的な役割を果たしました。



支部総会（6支部）

全国の支部活動のご紹介です。同窓生の皆様には各県支部に入会頂き、同窓生のつながりを深めて頂きたいと思えます。お問い合わせは、P28の支部長一覧をご参照下さい。

WAKA
YAMA

和歌山県支部総会

平成23年5月21日(土)宇都宮大学同窓会和歌山支部総会が、「かごのや」で開催されました。

今回、総会の参加人数こそ10名と少数ながらも、和歌山県関係の同窓生だけでなく、大阪在住の同窓生にも参加いただいたほか、新たに2名の和歌山県関係者の同窓生を迎え入れるという、明るい話題もあって、例年以上の盛り上がりを見せました。

和歌山支部は、元々会員数の少ない小さな支部ですが、ほぼ毎年この様な総会を開催できるのは、これまで同窓会を支えてこられた諸先輩方のご努力の賜であり、今後もこの伝統を途切れさすことなく、益々の発展に努めたいと思っております。

今回の開催にあたり、峰ヶ丘同窓会から名簿等たくさんの資料を提供いただきましたことに厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご指導、ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

仲 兼永

丘の思い出を語り合っていました。皆様のご協力により楽しく有意義な一時を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

(農業経済学専攻昭和55年(院)卒 後藤 四朗)



TOYAMA

富山県支部総会

平成23年8月5日(金)、富山市内の「しゅん家」において会員12名の参加により富山県支部同窓会を開催しました。

総会に先立ち、昨年度ご逝去された会員に心から哀悼の意を捧げた後、佐伯支部長の挨拶に続き、前年度の事業並びに決算報告と新年度予算案を承認いただきました。総会終了後、峰ヶ丘同窓会本部よりご派遣いただいた石栗太准教授からご講演を賜りました。

分り易い資料を基に、東日本大震災時の市内の状況や農学部附属里山科学センター等の母校の多様な取組みについて拝聴し、一同驚嘆するも今後のより一層の母校発展を願うばかりでした。

続く懇親会では、大学時代の思い出話に花も咲き、楽しいひとときを共有し、盛会のうちに終了することができました。

(亀田・記)



石栗先生を囲んで集合写真

IBA
RAKI

茨城県支部総会

去る7月2日(土)に水戸京成ホテルにおいて、平成23年度茨城県支部総会を開催し、47名の同窓の方々にご出席いただきました。

総会を開始するにあたり、この度の東日本大震災で亡くなられた皆様のご冥福と、被災された皆様へのお見舞い、そして一日も早い復旧・復興を祈念して黙祷を捧げました。

今回、大学からは来賓として、生物生産科学科応用生物学コースの香川清彦先生にお越しいただきました。先生からは、最近の大学構内の様子などについてカラーの資料に基づき、ご報告をいただき、皆さん在学中を思い出しながら熱心に耳を傾けていました。

総会後の懇親会では、大学で製造・販売している日本酒と焼酎をあわせて10本取り寄せ、皆さんにご賞味いただきました。また、出席者お一人お一人に、大学生協で販売しているエコバッグをお配りしました。

美味しいお酒に舌鼓を打ちながら、和気あいあいと峰ヶ

SHIOYA

塩谷支部総会

平成23年8月20日、恒例となっております峰ヶ丘同窓会塩谷支部総会が、矢板市内の「松島本店」にて開催され、支部会員11名が出席いたしました。

総会は、支部長の大桶一雄氏（農業経済科第23回）の挨拶で開会し、同窓会本部から来賓としてご出席頂いた、理事長の津谷好人先生（新農業経済科第16回）から大学の近況について、写真を交えながらお話を頂きました。

次いで、議事が進められ、支部長に田鹿元貞氏（林学科第6回）が就任いたしました。

お陰様をもちまして、久しぶりの再会を喜び合いながら会は大いに盛り上がり、次回の再開を楽しみにしながら、盛会のうちに終了することができました。

今後とも、当支部活動に対してご指導を賜りますようお願い申し上げますとともに、同窓会本部の皆様のご多幸をお祈りいたしまして、お礼とさせていただきます。

（農業経済科 第31回 森田 昭一）

身であり、一方、山梨県支部三役も全員林学科出身のため、戦前の宇都宮の話、平成の宇都宮の話、なかなか噛み合わない部分もあったようですが、孫以上に年の離れた後輩と意気投合、話の花が咲いていました。

参加者全員が来年の再会を約束して、祝宴は盛大の内に終了しました。 幹事 丸山 誠（開工22回卒）



山梨支部 林学科（祖父と孫）

YAMA NASHI

山梨県支部総会

平成23年度、峰ヶ丘同窓会山梨県支部総会は、奇しくも、昨年と同じ8月24日、午後6時から、甲府市内のホテル「談露館」において、会員33名の出席をもって、盛大に開催されました。



山梨支部全体写真

総会は、山梨県農政部長技監の加藤啓（開工6回卒）の開会挨拶に始まりました。

続いて支部長の山田公夫（旧林23回卒）のあいさつ、さらに、最高顧問である岩下勉（旧林19回卒）からの祝辞を頂くなかで、事務局から、22年度事業報告や23年度事業計画等の報告を行い、満場一致で承認されました。

続いての祝宴に移る前に、今回の東日本大震災でお亡くなりになった方やこの一年間で亡くなった山梨県支部会員の冥福をお祈りしました。

今年度については、総会の開催に向けて、今年から事務局を務める開発工学科が県庁等に就職した後輩の確認を積極的に行った結果、新たに数名の新人が県内に在住していることが判明し、早速、会員名簿に掲載するとともに、その内、今回の総会にも3人の方々に出席いただきました。

さて、幹事長を務める山口泰（総農8回卒）の乾杯により祝宴に遷り、今回初めて出席した方々全員が森林学科出

KANA GAWA

神奈川支部総会

3月11日に発生した東日本大震災では、広範囲にわたり大変大きな被害があり、本学関係者も多数被災され、一日も早い復興を祈念いたしますとともに心よりお見舞い申し上げます。

さて、当支部では3月5日に平塚駅前の平塚プレジールにおいて、本学より農学部生物生産科学科の香川清彦先生をお迎えし、無事に総会を開催することができました。

総会では香川先生からは映像を交えて現在の本学の様子をご報告いただき、会を盛り上げていただきました。総会に引き続き懇親会が行われ、久しぶりに集う会員同士の話は、酒が進むとともに時が立つのも忘れて盛り上がりました。会の締めには全員で高等農林学校歌と大学歌を歌いお開きとなりました。

また、今回は大学農場で生産された農産物を加工したお酒やチーズが当たる抽選会を行うなど新たな試みもあり、参加者には大変好評でした（これらの商品は大学生協で取り扱いがございますので、是非ともご賞味ください）。なお、次回神奈川県支部総会は2年後の予定です。

（室井 義広）



クラス会 (11クラス会)

全国のクラス会のご紹介です。毎年たくさんのクラス会が催され、ご寄稿いただいています。

1 クラス会 畜産学科8回生(昭和35年卒業) 卒業50年宇都宮に集う

わがクラス会は平成9年から毎年場所を替え既に14回連続開催している。開催時に翌年の開催場所を決め、開催場所出身者が現地情報を幹事に連絡、開催日は11月末の土・日曜日(最近は宿泊施設の確保し易い日・月曜日)と決めている。卒業24名、ブラジル在住1名、消息不明1名、鬼籍に入った方4名、クラス会出席者は10~16名で推移している。会がこのように長続きしているのは橋本(東京)が幹事となり吉江(栃木)、佐々木(埼玉)らと相談しながら会の運営・現地との連絡調整、開催場所の情報や資料の送付等の労をいとわず行ってくれるからである。

今回は我々卒業50年の節目の年なので宇都宮で11月28・29日に開催、畜産学科卒業で母校で教鞭をとっておられる杉田昭栄先生に演題「カラスの習性」で、カラスの習性・行動等について講演をして頂いた。更に最新の先生の研究、大学の現況に就いてお話をお聞きした。動物生産学科は対象動物の範囲が広くなり、習得科目の内容も大きく異なっていた。産業動物が中心の畜産学科の名称が無くなりOBとして一抹の淋しさを感じたが、他大学の状況をみても時代の流れで仕方がないことかもしれないと思った。

翌日、改装なった峰ヶ丘講堂を見学、構内を散策後、市内に戻り、すっかり宇都宮名物となった餃子を食べ、来年の再会を期して散会した。



出席者：前列左から、佐々木、室井、河内、増淵、新井(忠)、後列左から吉江、安保、橋本、相馬、小野。高橋(稔)は出席したが早朝出立、撮影時不在

(新井(忠))

2 クラス会 農芸化学科(16回卒) クラス会報告(2010年10月24、25日)

農化16回クラス会(43、3卒)は、千葉舞浜、神奈川箱根、愛知日間賀島を経て久しぶりに古巣に戻り栃木宇都宮で催された。傘寿を超えられて、益々ご壮健な藤沢徹先生

の出席を仰ぎ、伊東、榎本、大滝、木村、河野、清水、高梨、渡嘉敷(夫人同伴)、箱山、樋浦の諸兄に、柴田、橋本、田中の3幹事を加えて総勢15名で賑々しく、呵呵大笑しながら40年前の栃木北東部を巡りました。

初日は、大学の「峰ヶ丘講堂」会場に集合し、琉球大前教授渡嘉敷君による講義「沖縄の土壌、人口土壌の開発」を拝聴し、そのあとマンカラ楽団(伊東、柴田・渡嘉敷3君)のオカリナ・リコーダー演奏に陶醉。クラス会において講演会と演奏会とはまさに品格のあるクラス会となりました。この講堂で45年前(昭和39年入学時)に市村「社会学」、古橋「日本国憲法」などを聴講したのを懐古。

翌朝、観光バスで大田原市黒羽支所に行き、暦女ボランティアの案内で、「雲巖寺」見学と「大雄寺」の故五月女教授(応用微生物学担当)の墓参をして那珂川の高瀬ヤナで鮎を賞味しながら精進落とし。午後4時に宇都宮駅で散会、次回は山形庄内(高田幹事)で再会することを約束して解散した。(田中記)



3 クラス会 林学科 第4回昭和51年度入学生同窓会

平成22年10月9日(土曜日)、平成7年11月以来15年ぶりに開催された同窓会は、生憎の雨の中、各地より箱根(大平台「箱根嶺南荘」)に15名が集合しました。昭和55年3月に卒業し、爾来30周年の節目、久しぶりの再会に喜びとともに、各地の酒を携えた同窓生は、学生時代に戻り「呑みの林科」よろしく早速宴会の予行演習へと傾れ込みました。

全員が集まったところで、午後5時より会議場にて総会を開催し、役員の変更及び次回(2014年)開催地等の議案を滞りなく決議し、その後併設の宴会場へ移り懇親会を執り行いました。

懇親会では、幹事長の乾杯の後、出席者の近況及び残念ながら今回欠席となった同窓生の近況報告が行われました。

入念に予行演習を行ったにも拘らず、誰一人脱落する同窓生はなく、学生時代の話やカラオケで盛り上がり1次会、2次会と懇親は深まり、秋の夜長をおおいに歓談しました。翌朝、疲れた姿も見せず、朝食（ビール付）をあっという間に平らげた後、皆、またの再会を誓い三々五々小雨の煙る箱根から帰路につきました。

今回は、再会が叶うことのできなかった同窓生の皆様も、次回は是非ご参加を頂きたく存じます。

尚、卒業30周年を記念し「思い出のアルバム」を作成致しております、題材は少しずつ集まっておりますが、未だ完成には至っておりません。誠に恐縮ですが、今回欠席の同窓生の方で現在の写真が手立て出来ていない方々におきましては、今一度ご連絡を差し上げますのでご協力を頂ければ幸いです。

平成22年12月吉日

(幹事長 松末 俊哉) (同補佐 塩津 有喜)



前列左より 金井田、高木、石川、来栖、黒田、小牧、塩津
後列左より 松末、梶返、水越、巻田（西原）、羽山、
井上、櫛田、梅津 (敬称略)

4 農芸化学科19回生クラス会報告 クラス会

農芸化学科19回生クラス会を平成22年9月25日に群馬県水上温泉で行いました。=今回幹事は群馬県在住の奈良氏と山田氏=

仲間氏が遠路はるばる、沖縄より参加してくれました。

女性はここ2年 only one の参加（金子さん）でしたが、高梨知子さんも参加し、彩りを添えてくれました。

懇親会は「宇都宮大学歌」斉唱で始まりました。

= ♪♪ 高空に ひかりあかるく…ああ白雲の かげなびく 峰ヶ丘 ♪♪ =

毎朝、始業時にチャイムで聞いたメロディーなので、皆、懐かしがっておりました。中には涙を流す人もチラホラおりました。

大広間での懇親会後は、全員が2次会に参集し、時の経つのを忘れて飲み語り合いました。39年振りに顔を合わせた人もおり、思い出話は尽きずに古き良き青春時代を懐かしんでいました。

翌日は天神平ロープウェイに乗り、展望台で谷川岳や周りの景色を十二分に味わいました。日頃の行いが良いせいか、秋晴れの好天で眺望は絶佳でした。

昼食後に、翌年栃木での再会を約束してお開きとなりました。

今回は残念ながら、写真はありません。

次会は全員揃っての元気な笑顔の写真を必ずお見せ致します。

参加者16名：阿部・小川（福島）、小田部・桑川・後藤・斎藤・渋谷・関口・高崎・福島（栃木）、高梨知子（=近藤）（長野）、奈良（=豊川）・山田（群馬）、金子由利子（=林）（埼玉）、三好（千葉）、仲間（沖縄）。

尚、翌年2月19日に東日本ホテル（宇都宮市）での前田安彦先生叙勲記念式典後に、5講座OB&OG4名を含め11名でミニクラス会を行いました。

7月1日には蔵の街栃木市において暑気払いの会も行い、11名参加したことも併せて報告致します。

平成23年クラス会は秋に栃木県で開催致します。

今回残念ながら欠席されたお方は是非出席されますようお願い致します。

最後になりましたが、3月11日発生した未曾有の東日本大震災で被災された方々に対しましては、心より深くお見舞いを申し上げますとともに一日も早い復興を祈願しております。
(斎藤 光 河童忌に記す)

5 宇都宮農専農学科第22回 クラス会 (昭和22年3月卒業) クラス会

クラスメイトは大正から昭和初年生まれに、終戦で従軍帰還派が加わり、多様な若者55名（死去23名）からなりたっていたので、何時もワイワイ騒がしかったが、苦楽を共にした仲間：大昭会と呼びまともりは良かった。80歳を越えるとともに持ち回りのクラス会も卒業したが、「ヤッパリ何とか集まろうよ」になり、「手間を掛けない」「集まり易い方法」という事になり、KKRホテル東京で21・22・23年と会を重ねている。23年は5月30日 瓦井・毘野・鈴木・中山・仁尾・渡辺(田) 幹事（富川）・事務局（山中）出席者8名で開催した。

24年も5月29日(火)KKRホテル東京開催予定 多数ご参加下さい。

クラス会にはほとんど皆勤の桐山清様が、平成23年5月12日永眠。故人のご冥福を謹んでお祈りいたします。

(山中 道勇)



6 昭和39年 農芸化学科卒同窓会 クラス会

東日本大震災、復興も見えない中、昭和39年農化卒業生16人（24人健在）が集まった。母校を卒業して46年、ほとんどが現役を離れ、悠々自適の生活。古希を過ぎ次の節目、喜寿を目指し新たな思いを秘め皆意気盛んでした。

6月12日(日)午後4時、栃木県庁集合、15階から変貌した市内を俯瞰、時の流れと老いを実感。県庁から二荒山、オリオン通りを散策、6時からホテル丸治で宴会。

司会の海老原からあまり知られていない栃木県の深刻な震災状況の報告が、宮城県・村田町の小関から水も電気も食べ物もない、壊れかけた家でのすさまじい耐乏生活が語られた。

各人の近況については、事前に取得した近況報告（つぶやき）を宮田がレイアウトし印刷・配布したので、話題も豊富、話が弾んだ。また、田中のオカリナの調べは、高く低く哀調をおび酒席をさらに盛り上げた。

翌13日、母校、宇都宮大学を訪問。食品化学の宇田靖教授のご案内で主要な施設を見学した。広いと感じていた学内も建物が並び昔日の農村の影は感じられなかった。見学の終わりは新しく出来たUUプラザ、大学と社会と結ぶ架け橋だそうで、大学も進化しているという実感を得た（2階からみるフランス庭園は圧巻である）。

宇田教授は本学生え抜き、私どもの5年ほど後輩であるそうで、的確な説明といろいろな経過、また、礼を尽くされた対応など、深い感動を得た。

最後に大学会館で学食を食う。こんな味か！

そして4年後の卒業50周年の再会を期し帰途についた。

今回の会合は11年ぶり、幹事は、佐々木が企画。伊藤が案内状の発送、出欠の確認、写真。海老原が大学関係・峰ヶ丘同窓会の折衝、県庁・市内案内。宮田がホテルの選択と折衝、宴会の設営。柿澤が会計を担当した。ご苦労様でした。

写真：伊藤 純敬

文責：佐々木 久



【2011.06.12】昭和39年卒同級生会（於）ホテル丸治

7 総合農学科第6回生 50年ぶり母校訪問 クラス会

平成22年の同級会は卒業以来50年に当たるので母校を訪問することになり、栃木県在住者が幹事を務めた。

昭和35年3月卒業の総合農学科第6回生の同級会は第1

回を農学部創立80周年記念式典に合わせ平成14年11月に宇都宮で開催。以来毎年各県持回りで開いている。

9回目となる平成22年は10月28日、JR宇都宮駅に13時集合、マイクロバスでキリンビール栃木工場を見学の後、県東部の馬頭温泉・南平台温泉ホテルに16時到着。

参加者は14名、例年に比べ少なかったが、旅装を解き、ゆっくり温泉に漬かった後、恒例の宴会に入る。話題は近年健康維持のことが増え、夜の更けるまで語り合い楽しい一夜を過ごした。

29日は朝から好天。ホテルの部屋からの日光連山は美しい眺めであった。ホテルを9時出発、馬頭広重美術館で歌川広重の東海道五拾三次などを鑑賞して宇都宮へ向かう。

大学には11時到着。フランス式の庭園は良く手入れされ私たちを温かく迎えてくれた。修復された講堂では当時の講義を思い出して懐かしむ。最後に庭園で記念撮影。母校訪問の記念に宇大の絵はがきと清酒「峰ヶ丘の風」を土産に校門を後にした。訪問に際しては峰ヶ丘同窓会の多田様に大変お世話になった、感謝申し上げる。

JR宇都宮駅近くのホテルで昼食。10回目となる平成23年は東京で再会することを約して13時30分解散した。

参加者14名は、阿久津、五十嵐、木村、菊池、小曾戸、齋藤、代田、佐藤、新保、相良、田口、藤田、堀江、見山（代田 正雄）



総合農学科卒業後50年記念（平成22年10月29日）

8 畜産学科第11回 古希を迎えてのクラス会（2010年12月） クラス会

我々のクラス会はこの10年余り峰ヶ丘同窓会ただ一人の現役衆議院議員・吉田公一君の当選祝賀会を兼ね宇都宮市内で開催して来ましたが、今回は人生節目の古希を迎えたこともあり、また平成21年8月の総選挙において吉田君が当選（小選挙区で3回当選今回は比例東京ブロックで4回目の当選）の祝賀会もやっていなかったため併せて12月10日東京都内で開催した。

当日は先ず希望者のみ東京駅丸の内南口に集合「はとバス」に乗車、皇居・浅草（東京スカイツリーを眺望）そして東京タワーを巡る半日東京観光を実施。

その後クラス会出席の全員が新しく完成した衆議院第一議員会館に集合、吉田君の出迎えを受けた。国会衛視さん

の丁寧な案内により国会議事堂内をつぶさに見学し、終了後は近くの赤坂一ツ木通りの中華料理店に会場を移し懇親会を開催した。

今回は同級生23名（24名のところ1名物故）の内16名が出席したが、中には卒業後47年ぶりに初めて出席した同級生もおり戸惑う場面もあったが、会が始まるや一瞬にして学生時代にタイムスリップ、懐かしい思い出話に時間が経つのも忘れ旧交をあたためることができた。今後の励みにもなり同級生一同大いに喜び、楽しいクラス会であった。

次回は一泊でのクラス会を約束し、そして吉田公一君の今後の活躍を期待し散会した。

今回体調を崩したり、都合悪く出席できなかった同級生諸君、次回のクラス会には是非ご出席下さい。楽しみにしております。



クラス評議員 高山 陽一記

9 第47期生同級会のご報告 クラス会

平成23年4月15日、宇都宮大学農学部農学科47年卒の同窓会が、高知県四万十川の川辺で行われました。

同窓生が還暦を迎えた翌年から「元気で体の動くうちにできるだけ遠くの学友の処でクラス会を開こう、夫婦での参加は大歓迎!!」との意見合意の下、関東圏以外での1回目は、ご承知のとおり、昨年夏の北海道でした。今年は是非四国で、との話になり、日本で最も交通の便の悪い（東京からの時間的距離が最も遠い）と言われている高知県南西部、四万十川での開催となった次第です。



同窓会当日 宿泊ホテルにて

予定日の1ヶ月前に東日本大震災・福島原発の事故が発生し、開催できるか危ぶまれましたが、「こんな時だからこそ集ってみよう」と意見が一致して、福島県いわき市の1名を除き、総勢15名の参加となりました。飛行機・船・鉄道・レンタカー等を使って、各々自由な来方でしたが、しみじみ遠いな——と感じられたのではないのでしょうか。

還暦を過ぎてこれからの生き方や現在の状況が話題の中心でしたが、今後の生き方は、震災と原発事故から相当の影響を受けるだろうとの気持ちが強く感じられました。短い時間の再会でしたが、それぞれの思いを語り、友情を確かめあった一時でした。高知県幡多地方・四万十川の郷土料理も心行くまで味わっていただけた事と思います。

次回は栃木県で開催、先生方にも出来るだけ参加して頂いて、との約束をして別れました。時間に余裕のある方たちは、四国周遊、更には中国地方・山陰に迄足を伸ばした人もいたようです。本当に遠路はるばる出かけていただいて有難うございました。（山下 洋文）

10 長良川で同窓会（A6） クラス会

ようこそ名古屋へ。今年度（23年）農学科第6回生同窓会、岐阜県長良川川畔鶴匠の里「スギ山」にて8月7日～8日伝統の鵜飼観賞をメインに開催致しました。

幸い当日は天気も良く、鵜飼船にてかがり火にかがやく鵜飼を楽しむ事が出来ました。

三味の音がとばりを渡る鵜飼船

鵜がおどる赤きかがり火長良川

今回の同窓会は東日本大震災による被害を受けた方も多く、開催があやぶまれましたが長年継続している同窓会への思い入れが上まわり開催致す事になりました。

来年には全員喜寿を迎える事になりますが、この会が末長く開催されることを祈っております。



宇都宮大学 農学部農科同窓会 2011.8.7 於 すぎ山

（青木・天谷・荒井・岡田・岡本・佐藤・鈴木・高野・高橋・嶽石・中沢・中島・橋本・福田・武藤・山野・渡辺）
（幹事 鈴木）

11
クラス会旧農専・農科昭和25年卒業生、
26回目の同級会（塩原にて）

5月25、26の両日、新緑まぶしい塩原温泉「たちばな家」で12名が参加して開催された。ここは20年前（平成3年）今は亡き若井田先生、海老原先生のお2人を迎えてクラス会を開催した思い出深い宿であった。

この会も今回で26回を数えるが、卒業時38名だった級友は、15名が残念なことに鬼籍に入れ、今は23名となった。然し、全員が既に80才を過ぎ、出席が難しい人も多くなってきたため、今年で持ち回りのクラス会は一応終止符を打とうということになっていた。

我々のクラスは、昭和22年4月旧農専に入学し、25年3月に卒業したが、戦後まもないこともあり、級友も軍関係の陸士や予科練にいた人や、旧制の中学校、農学校、商業学校出身の人達が共に机を並べ、年令も年長者と若い人では5才の違いがあった。然し年上の人のリーダーシップよろしく、まとまりに問題はなく、日々の話題にも事欠かず、思い出深い3年間だった。

今回の会合も、さすがに酒量は減ったものの、1次会から2次会へと進んで、卒業後姓が変わった人を、学生時代の旧姓で呼び合う頃は、60数年前の峰ヶ丘時代にすっかり戻っていた。

今回が最後のクラス会となったが、戦後の苦しい時代を懸命に生きた同級生の絆は、生ある限り大事にし、集まりたい時はいつでも連絡を取り合うことにして、名残りを惜しみつつ散会した
(和賀井)



出席者：尾形、高橋（福島）上遠野、野本（埼玉）
竹沢、増山（神奈川）野崎（長野）
荒井、樋口、久野、高岩、和賀井（栃木）

大学祭の開催

宇都宮大学第63回峰ヶ丘祭が平成23年11月19日(出)から11月21日(月)まで「結実」をテーマに開催されます。

詳しくは下記のホームページをご覧ください。

<http://minegaokasai.web.fc2.com/gakusai/index.html>

下の写真は平成22年度 第62回 峰ヶ丘祭の様子「宇天決行」のテーマ通りとなりました…



平成23年度秋季オープンキャンパスの開催

今年度の秋季オープンキャンパスが下記の通り学部ごとに開催される予定です。
農学部では9時から模擬授業を行い、その後進学・入試相談会を行う予定です。

農学部	12月17日(土)	国際学部	11月19日(土)
教育学部	10月24日(月)	工学部	11月13日(日)

教員・学生への教育研究支援報告 支援制度による海外学会参加報告

学生支援制度海外学会参加報告

森林科学専攻 H22修了
中 條 未由希

2009年11月2日から3日にかけてインドネシアにおいて開催されたTHE FIRST INTERNATIONAL SYMPOSIUM OF INDONESIA WOOD RESEARCH SOCIETYで、私は“Micropropagation and Protoplast Culture in *Paraserianthes falcataria*”というタイトルで発表を行いました。発表内容は熱帯産のマメ科木本である*P.falcataria*の、組織培養技術を用いた大量増殖法及び細胞癬を除去された細胞であるプロトプラストからの植物体の再生法の確立を目的としたものでした。

インドネシアについては、以前から調査のために訪問されていた石栗先生や研究室の先輩方から話を伺う機会があり、漠然としたイメージはあったのですが、昔ながらの文化と新しく取り入れたものが混在し、急速に変化を続けているこの国への訪問は、日本しか知らなかった私にとって非常に新鮮な体験となりました。学会中には、英語だけでなく流暢な日本語で話しかけられるという機会も多々あり、インドネシアから日本への留学の経験のある方が多いことにも驚かされました。一方で、私にとって初の国際学会であり、そのうえ英語での口頭発表ということもありましたが、発表をこなすだけで手いっぱいになってしまい、

その後の質問を辛うじて理解することはできたものの、英語でうまく返答することができず、これまでもっと英語を勉強しておけば、と悔やまれることもありました。

今回の学会では、発表後の質問時間だけではなく、発表の合間の休憩時間にも活発な討論が交わされており、私が現在携わっているテーマに関しても、最近の研究成果についての情報を交換する機会にも恵まれ、今後の研究への大きな弾みとなりました。

最後になりましたが、このような貴重な経験をすることのできた国際学会への出席にあたり、支援して頂きました峰ヶ丘同窓会の皆様にご心より感謝申し上げます。



ロシアでの国際学会に参加して

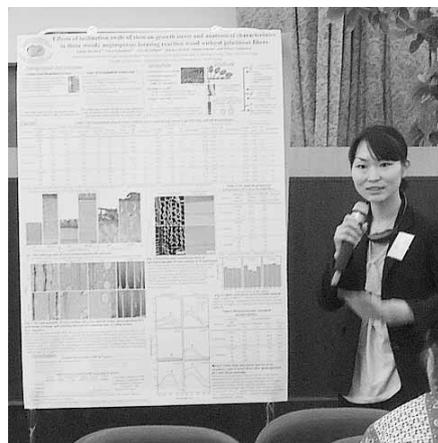
連合農学研究科博士課程3年 森林資源利用学研究室
平 岩 季 子

この度、峰ヶ丘同窓会教育研究支援制度の援助により、2011年6月20～24日に、ロシア連邦のカレリア共和国・ペテロザヴォーツクで開催された International conference “Structural and function deviations from growth and development of plants under the influence of environmental factors”において、研究発表をさせて頂きましたので、報告いたします。

本学会では、「Effects of inclination angle of stem on growth stress and anatomical characteristics in three woody angiosperms forming reaction wood without gelatinous fibers」という題目で、幹の傾斜角度、すなわち重力ストレスが木本被子植物の成長応力、組織構造および化学的特徴に与える影響についてポスター発表を行いました。国際会議という場で、多くの海外の研究者達と議論を交わし、交流を深めることにより、自分自身を英語で表現する技術を向上させることができたと感じています。

学会主催のツアーでは、世界文化遺産に登録されているキジ島の木造教会を見学することができました。修復中で

あったため、教会内に入ることはできなかったのですが、玉ねぎ型のドームを多数もつロシア正教特有のフォルムの美しさやその巨大さに圧倒されました。キジ島の環境も、湿原と草原が島のほとんどを占め、周囲に小さな島がたくさんあり、のどかで美しい景観を楽しむことができました。今回、このような貴重な機会をくださった峰ヶ丘同窓会会員の皆様および理事長はじめ役員の皆様にご心より感謝申し上げます。



平成23年度峰ヶ丘同窓会理事会報告

平成23年6月25日13:30より、ホテルサンシャイン宇都宮において、志賀徹庶務担当理事の司会のもとに、平成23年度峰ヶ丘同窓会理事会が開催された。以下に、項目別に議事内容を述べる。

1. 物故者への黙禱

理事会の開催に先立ち、物故者への黙禱を行った。

2. 同窓会長挨拶

和賀井睦夫峰ヶ丘同窓会長より、東日本大震災に対する同窓会の対応や、2012年に開催予定の開学90周年記念事業、また、旧講堂の正式名称が大学発祥の地名である峰ヶ丘講堂に決定したことについて説明がなされた。特に東日本大震災に関しては、3名の同窓生が亡くなられたことに哀悼の意を表し、同窓会として被災した約1000名の同窓生にお見舞い状を送付したこと、家屋の倒壊等の甚大な被害のあった在学生6名に学費支援金や見舞金をお渡ししていることについて説明がなされた。

3. 議長選出

慣例に従い、満場一致で和賀井睦夫峰ヶ丘同窓会長が議長に選出された。

4. 会務報告

田中秀幸峰ヶ丘同窓会理事長より、支部総会、理事会、宇都宮大学各学部同窓会連絡協議会、臨時理事会の各開催状況と、農学部秋祭りや農学部米寿国際連携教育シンポジウムへの協賛、峰ヶ丘同窓会報の発行、学生支援制度による学費支援や入院見舞金など、平成22年度の会務が報告された。また、東日本大震災への同窓会の対応についても、説明がなされた。

5. 平成22年度決算報告、及び監査報告

石栗太会計担当常任理事より、人件費（職員給与）、教員研究支援費、学生支援費、名簿発行特別会計について決算報告がなされた。特に雑費について、ホームカミングデー、農学部秋祭り、農学部米寿国際連携教育米寿シンポジウムへの協賛金によって、大きく決算額が膨らんだ点について説明がなされた。その後、大野敬治監事（工39）より監査結果が報告され、決算報告は満場一致で承認された。

6. 平成23年度予算案

石栗太会計担当常任理事より、会務内容と併せて平成23年度予算案が説明された。特に、東日本大震災に対する学生支援金、及び見舞費金として、基本財産特別会計からの一般会計へ140万円の繰入を予定していることが説明されたこと、大震災によって新入生歓迎会が自粛となったために、そのための経費が予定されないことが説明された。また、4月以降の平成23年度の会計年度において、既に学生支援金などの支出が行われていることについて、和賀井睦夫同窓会長から説明があり、予算案は満場一致で承認された。

7. その他

和賀井睦夫峰ヶ丘同窓会長より、理事長 津谷好人（経45）、常任理事 宇田靖（化45）とする役員改選が提案さ

れ、満場一致で承認された。その後、津谷好人峰ヶ丘同窓会新理事長より挨拶いただいた。

笠原義人副会長より、新しい大学の広報施設としてUUプラザが開設されたこと、東日本大震災に関して、大学が同窓会とは別の、独自の宇都宮大学同窓会義援金活動を行ったこと、次回のホームカミングデーの開催日程については、まだ検討中であること、農学部の90周年記念事業は、2012年10月に開催することが決定したこと、その記念事業の実行委員会には、同窓会の常任理事、会長、副会長、栃木県庁支部長が入ることが予定されていることが説明された。これに対して、まず、竹永博理事（工40）より、秋祭りに同窓会は協賛しているが、具体的に同窓会に門戸を開くような対応があっても良いのではないかと、との質問があり、志賀徹庶務担当理事より、現在秋祭りについては、開催意義について議論中であること、また、頂いたご意見をぜひ検討したいとの答弁があった。次に、湯浅甲子理事（獣19）より、宇都宮大学ランドデザインにおける峰ヶ丘講堂の位置づけ、教員研究費や学生支援費などの同窓会が支出する母校支援金を一括して宇都宮大学基金に入れる提案、大学の発展のための同窓会評議員の位置づけについて質問があった。これらの質問については、田中秀幸峰ヶ丘同窓会理事長より、ランドデザインにおける講堂の位置づけについては今後情報を収集して対応を検討すること、母校支援金については、農学部単位で支援することによる独自性を尊重していること、評議員の位置づけについては、益々若くなる世代の会費の徴収や名簿作成など、今後常任理事会で検討を加えていきたいとの答弁がなされた。更に、和賀井睦夫会長、並びに笠原義人副会長より、これらの質問事項について今後常任理事会で積極的に検討していきたいとの答弁がなされた。

理事会終了後、引き続きホテルサンシャイン宇都宮において、進村宇都宮大学長、及び茅野農学部長を来賓に迎え、懇親会が開催された。

文責 会計担当常任理事 岩永 将司

会 務 報 告

1. 支部総会等の開催

2010. 7. 3	茨城支部総会	志賀理事
7.10	山形支部総会	志賀理事
8. 6	富山支部総会	吉澤理事
8.20	静岡支部総会	茅野学部長
8.26	県庁支部総会	和賀井会長・笠原副会長
9. 4	長野支部総会	志賀理事
9. 4	塩谷支部総会	石栗理事
9.11	宮城支部総会	和賀井会長
9.11	岩手支部総会	田中理事長
10.23	秋田支部総会	津谷理事
11.12	群馬支部総会	石栗理事
11.20	福島支部総会	田中理事長

お祝い

このたびは、おめでとうございます。

内閣人事

- 法務大臣政務官
谷 博之（総農41卒）

衆議院人事

- 衆議院農林水産委員長
吉田 公一（畜38卒）

外務省人事

- 駐モザンビーク大使
橋本 栄治（農49卒）
- 平成22年度 瑞宝中綬章
前田 安彦（化26卒）

昇任

- 山根 健治（生物生産科学科植物生産学 教授）
- 燕山由己人（生物生産科学科応用生物化学 教授）
- 横田 信三（森林科学科 教授）
- 青山 真人（生物生産科学科動物生産学 准教授）

寄贈図書

- 記念誌「宇都宮大学農学部畜産学科9期会
（卒業50周年の記録）」
森本 正幸
- 「ある技術コンサルタントの生涯」
亀和田光男（農昭16年）
- 「花の百名山登山紀行、次世代に残そう山の花」
稲泉 三丸（農昭37卒）・稲泉 弘子
310p. カラー写真32p. 郁朋社刊. 1,500円＋税

寄付

- 山田 幸二（総農31卒）
H22. 11. 20 ご寄付をいただきました。

第2回ホームカミングデーはいつか

渡邊直樹・副学長（第1回ホームカミングデー実行委員会委員長）は、「ホームカミングデー報告書」（2011年3月刊）の「あとがき」で、「ホームカミングデーが今後継続的に実施されるようにとの希望が多数寄せられています。アンケート調査等も十分勘案させていただき、今後のホームカミングデーの在り方について考えていきたい」と述べています。

「ホームカミングデーの開催年について」（参加者へのアンケート調査）は、2年に1回程度の回答がもっとも多かったが、3年に1回程度、毎年開催等の回答も多く、参加者の意見が比較的分かれています。今後、アンケートの結果を参考にしながら第2回ホームカミングデーの開催時期を決定する必要があるものと思われる、と「ホームカミングデー報告書」に記述されています。

◆表紙写真の説明

今回は峰キャンパスから離れて、真岡市下籠谷にある附属農場の写真に掲載してみました。手前の建物が管理棟で奥が宿泊棟です。宿泊実習中、早朝の草刈り作業後に朝日が眩しい中撮影しました。なお、附属農場は「教育関係共同利用拠点」に認定されたことから、他大学の学生も来て宿泊実習を行っています。（香川）

次回会報発行日程・ 原稿締め切り日のお知らせ

会報次号の発行は、2012年7月30日の予定です。原稿の締め切りは、5月30日となりますので、宜しくお願いいたします。

お詫び

昨年発行の会誌148号の訂正
8頁特集記事
「参官金学」→「産官金学」

編 集 後 記

今号は昨年より1ヶ月程早い発行となりましたが、次号については90周年事業のご案内を掲載するため、さらに早くなります。投稿を予定されている方はお早めに原稿をお送りくださるようお願いいたします。今回、大震災の特集をするにあたって、寄稿にご協力頂いた皆様にはこの場を借りて感謝申し上げます。改めて、一日も早い復興を祈念いたします。

（香川清彦）

こんなこと

やっています (その5)

附属演習林

附属演習林は、栃木県内にある船生演習林と日光演習林から構成される教育研究施設です。森林と人間との多様な持続的な相互関係に関する実践フィールドとして、持続的保全管理に基づく体験的教育を通じて、森林に関する専門家の育成、新たな森林管理論と高度な実践的技術の普及や最新情報の発信によって社会に貢献しています。

ここでは、森林整備の一例を紹介します。船生演習林の森林管理は、技術系職員7名により直営方式による素材生産事業や林道の開設・維持管理等を行っています。事業を円滑に安全に実行するため、稼働している主な林業機械は、フォワーダーが4台、タワーヤードはクローラタイプ1台とホイールタイプ1台、スイングヤードが1台、プロセッサが1台、大型チップパーが1台、ブルドーザーが2台、油圧ショベルが1台、トラックが3台、ホイールローダが1台、そしてフォークリフトが1台である。写真1は、ヒノキ丸太を搬出中の昨年度に購入されたフォワーダーです。このように、保有している高性能林業機械を駆使して、森林の維持管理や教育研究を行っています。

これらの森林整備を通じて生産された素材（ヒノキ小丸太、材長3m 径級16～24cm 数量63本）が、平成23年3月18日(金)に矢板市の栃木県森林組合連合会高原林業地区協業センターで開催された平成二十三年春季優良木材（素材）展示会で、「栃木県環境森林部長賞」を受賞しました（写真2）。本展示会は、栃木県森林組合連合会と那珂川流域森林・林業活性化センターの共催で開催しているものです。近年における演習林の素材の受賞は、平成十七年春季の「栃木県森林組合連合会会長賞」（アカマツ大丸太）、平成十九年秋季の「関東森林管理局長賞」（ヒノキ小丸太）、平成二十一年春季の「とちぎ高原材ブランド化推進部会長賞」、そして平成二十三年春季の「栃木県環境森林部長賞」で4度目になります。

今回受賞した林齢61年の主伐されたヒノキは、高性能林業であるタワーヤードで全木集材後、プロセッサで造材した丸太です。集材にタワーヤードを使用することで、地表面を攪乱しないように配慮しています。また、丸太生産では、樹幹の通直性や形状等を見極め、プロセッサできめ細かに採材しています。さらに、森林バイオマス資源の有効活用のため、小径丸太などは原料材として販売しています。

写真3は、省力林業といわれている列状間伐を実施した2年後の42年生のヒノキ林です。林床には植生は侵入して、明るく美しい森林となりました。写真4は、明治43年（1910年）植栽のヒノキ林です。このような長伐期施業林の間伐も実行しています。

演習林では、森林・林業の実践的な教育・研究のフィールドという使命はもとより、栃木県における先導的・モデル的な森林施業を行っています。今後とも将来に向けて、演習林の役割および森林の有する多面的な機能を高度に発揮させるため、適正な森林施業を通して、高蓄積・高循環の森林の育成を目指し、持続的な森林経営を行っていく所存です。（文責：演習林次長 飯塚和也）

- ◆ その1 附属農場 峰ヶ丘会報第145号
- ◆ その2 雑草科学研究センター 峰ヶ丘会報第146号
- ◆ その3 バイオサイエンス教育センター 峰ヶ丘会報第147号
- ◆ その4 里山科学センター 峰ヶ丘会報第148号



写真1
新規に購入されたフォワーダー



写真2
「栃木県環境森林部長賞」の賞状



写真3
列状間伐の2年後のヒノキ林



写真4
林齢101年のヒノキ林

ファイリング用中心点